

宵の歌姫



1：鎮魂歌

そこは、決して朝の来ない世界。永遠に閉じられた夜の世界。空には小さな星々が地上の人々を導くために懸命に輝き、地上には魔法の光がぼつぼつと星の光を消してしまわない程度に咲いている世界。

本当かどうか分からないが、神が、戦争に勝ったたったひとつの国だけを、朝の来る世界へ誘うと約束したとされる、戦の絶えない世界。暗闇に覆われた静かな世界。

人は神話を疑うことをしなかった。いや、疑う余裕など、人は持ち合わせてなどいなかった。

神話にはこうあった。

かつて、この世界には朝が訪れ、昼があり、夜が帰ってきた。人はタイヨウの昇る明るい青空のもとで、長い年月慎ましく生活を営んでいた。神はそれを微笑ましく思い、人間を愛していた。

しかしあるとき状況は変わった。

人は土地をめぐり、兵器をめぐり、資源をめぐり、様々なものをめぐり、戦争を始めた。

兵器や魔法を用いた、醜い争いだった。神は人同士が相争うことに心を痛み、醜い戦をやめるよう各国に言い渡した。しかしどの国もこう言い張るばかりだった。

「自分のところが先に始めた戦争ではない。向こうがこっちに仕掛けてきたんだ」

どの国も、相手が先に戦争をやめない限りはやめる気がなかった。神は非常に憂えた。悲しんだ。哀れんだ。しかし人は戦いをやめなかった。だから、神はしまいにはこう言い渡した。

それならば私はこの世界からタイヨウを消し去ることにしよう。タイヨウの恵みをおまえたちにもう与えないことにしよう。

もしタイヨウが欲しいのならば、途方もない戦いを続けるがよい。もっとも強かった国だけを、タイヨウのある世界に連れていくことにしよう。

そうして、この世界からはタイヨウが消え去った。光が失われた。永遠に夜の続く毎日が始まった。

人は変わらず、いや、タイヨウが消え去る以前以上に、戦争を繰り広げるようになった。

そんな世界で、少女と狐は生きていた。

少女は名をミノリといった。

夜空のような漆黒の長い黒髪に、群青色の瞳、雪のように真っ白な肌をした愛らしい少女は、狐と共に各地を渡り歩いていた。

狐は名を宵風といった。

金色の美しい体毛にふわふわとした尻尾、どこか気高さを感じさせる風貌を持つ彼は、各地を渡り歩き、歌を歌い続ける少女にずっと付き従っていた。

二人はてくてくと果てしなく続くかのように思われる長い旅路を歩いていた。

空には満天の星。街灯はないが、足元がはっきり見える程に十分明るかった。神はタイヨウを消しはしたが、代わりに星の数を増やしてくれたのだ。

周囲に人気はなかった。辺り一面、草原が広がっていた。二人はひたすら黙々と歩き続けていた。と、不意に宵風が頭をもたげて少女の方を窺った。

「ミノりはん、大丈夫ですか？」

話しかけられたミノりは、足元から宵風の方に視線を移して、にっこりと笑った。

「大丈夫だよ。まだまだ元気。あと少しで町に着くでしょ？ まだ頑張れるよ」

そうは言ったが、ミノリの顔には疲れの色が見えていた。付き合いの長い宵風は、ミノリが多少無理をしていることを悟る。少し眉間に皺を寄せて、心配するかのようクーンと一声小さく鳴いた。

「頼むから、あんまり無理せんといてえな。我はあんさんが心配やわあ」

「大丈夫だってば。ほんと、宵風は心配性なんだから」

ミノりはそう言って少し歩調を速めた。まだまだ元気であることを宵風に示すためだ。

首からぶら下げた懐中時計を確認すると、時刻はもうミノリが普段眠る時間になっていた。

それに気づいて一旦立ち止まってから慌てて鞆から地図を取り出し、今向かっている町までの大体の距離を確認する。その間宵風は周囲に目を配って何か危険なものがないか、見張りをしていた。いや、彼は歩いている間もずっと、危険なものが近くにないか注意を怠っていなかった。彼はミノリのボディガードでもあるのだ。

星明りのなか目をこらし、宵風の狐火も使って地図を見ると、目的の町までそう距離がないことが分かった。安心して地図を鞆に戻し、再び足を動かし始める。

宵風に余計な心配をかけまいと、ふんふんと鼻歌まで歌って元気であることをアピールする。宵風はそれがミノリの強がりであることを察してはいたが、もう何も言わなかった。二人は互いに話さず黙々と歩き続けた。

道は急な坂道に差し掛かった。

流石にしんどいのか、ミノりは鼻歌をやめて額に汗を浮かべながらふうふうと息をつき、坂道を登っていく。重い荷を中に詰め込んだ鞆の肩紐が肩に食い込む。少しでも痛みを和らげようと、肩紐を手で握ってミノりは歩き続けた。そんな彼女を時折案ずるように宵風が見やる。

「ミノりはん、荷物、我が持とか？」

「いい、大丈夫」

「もう見てられんわあ。人型になるから、荷物、我に貸しい」

「大丈夫」

そう言って、ミノりはますますきつく肩紐を握り締める。その頑なな様子に、宵風はふうとひとつため息をつきながらも渋々従った。またしても会話がなくなり、二人は静かに歩みを進める。辺りは静けさに包まれていた。聞こえるのは、さくさくと二人が草を踏みしめる音と、ミノリの荒い息遣いだけだった。

と、突然坂道が緩やかになった。そして下の方に開ける視界。丘の頂上まで登りきったのだ。

丘からは目当ての町が見下ろせた。町の街灯がぼつりぼつりと等間隔をあけて立っているのが確認できる。久々に見た街灯だ。ミノりは嬉しくなって、満面の笑みを浮かべた。

「町だ」

彼女の眩きはそよ風にさらわれていく。

「園芸の町、ハナミやなあ」

どこかほっとしたような口調で、宵風が答えた。

町に入ると、二人は早速宿を探した。宿はいくつかあったが、二人はそのうち一番宿泊費が安い宿屋を選んだ。もう遅い時間なので受付が終わっているかもしれない、又は満室になってしまって受け入れてもらえないかもしれないと宵風は危惧していたが、はたしてそれは単なる杞憂に終わったようだった。

ミノリは無事チェックインを済ませ、一人で宿屋の階段を上がる。宵風は宿屋の外で上を見上げながら、待つ。

暫くすると、窓の一つが開かれた。そしてひょっこりと少女が顔を覗かせる。ミノリだった。

二人は目だけで会話すると、ミノリがずっと頭をひっこめる。

宵風はひとつ頷いて、少し後ろに下がった。そして勢いよく助走をつけて、力強く大地を蹴る。

たんと小気味良い音が小さく響いて、宵風の身体が風のように軽やかに宙を舞った。

そして開いていた窓を上手い具合に通りぬけて、ミノリの待つ部屋へと着地する。

着地の際、ほとんど音はたたなかった。軽やかな動作で三階の部屋に降り立った彼を、ミノリはいつものように感嘆の眼差しで見つめる。

「いつ見ても綺麗。やっぱり宵風は宵の風の化身だね」

宵風は笑った。心地よいテノールが夜のしじまに溶け込んだ。

「早くシャワー浴びて寝よ。疲れたやろお。流石に私も疲れたわあ」

ミノリは軽く頷いて荷物のなかをがさごそと探り、愛用のお風呂用器具を取り出した。そして二人は交互に浴室を使い、小さな一つのベッドで一緒に眠った。

翌日。ミノリが目を覚ましても、やっぱり空は変わらず星空だった。

ミノリは身支度を済ませると、階下に降りて一人で朝食を摂った。こっそりパンなどをあらかじめ持ってきていた袋のなかに入れていき、少ない食事をさっさと終わらせる。階段を上がって部屋に戻ると、宵風が毛づくろいをしていた。ミノリの姿を認めると、宵風が毛づくろいをやめて穏やかに微笑む。

「お待たせ。これ、ご飯」

「おおきに。いつもすいまへんなあ」

宵風が食事をしている間、ミノリは出かける支度をしていた。宵風は食べるのが速いので、急がなくてはならない。あつという間に食べ終えた宵風が、歯磨きをするために浴室に消えると、ミノリは食事の後を片付けて支度を終えた。

浴室から出てきた宵風は、そのまま前日の夜とは逆に、窓を抜けて外に降り立つ。宵風が無事地に降り立ったのを確認すると、ミノリは窓を閉めて鍵をかけ、荷物を肩から下げて部屋をきちんとチェックし、ドアを開けて廊下に出た。ドアに鍵をかけ、階段を下りていく。

寂れたロビーを抜けて、宿屋の外に出る。外では、宵風がミノリを待っていた。ミノリが姿を現すや否や、宵風が小首を傾げてミノリを見やる。

「この町では、どこで仕事するん？」

「宿屋のご主人に聞いた話じゃ、この町では広場みたいなところよりも駅の方に人が集まるみたいだから、駅の前で歌うことにする」

「ほな、駅に行こか」

ミノリは宿屋の主人に聞いた道順を辿って駅に向かう。その傍らを、宵風が悠々と歩いていく。

町の住人が珍しそうに宵風と、彼を連れているミノリを見やるが、二人はそんな好奇の視線に気づいているのかいないのか、全く気にした風もなくまっすぐ前を見て歩く。ミノリの場合は本当に気づいていないのだろうが、宵風は気づいているものの、気にするまでもないと思っているのだろう。

駅は宿屋から歩いて十五分程度のところにあった。

道順は単純だったので、二人は迷わずに到着することができた。

町自体がそれ程大きくないので当然といえば当然のことであったが、小さな駅だった。

しかし、人通りはそれなりに多かった。ミノリは満足して頷き、駅の階段を数段上がると足元に荷物を置いて被っていた帽子を取り、帽子も裏向けて地面に置いた。宵風はミノリと荷物を守るかのような姿勢でミノリの足元に腰を落ち着けた。

人々は時折二人に好奇の視線を向けるが、それ以上のことはない。立ち止まって見つめるなどといったことはしない。

しかし、それはまだ歌が始まっていないからだ。歌はこれから始まるのだ。ミノリは誰も自分たちのことを知らない町で、背筋を伸ばして立った。

少女はすうっと大きく息を吸い込んだ。そして、透き通るような声で歌い始めた。

貴方が眠る 静かな世界
私ひとり夜の世界に取り残された
当たり前 朝が訪れ
昼に目覚める世界を私は知らない
忘れないで
忘れないで
お星様は 私たちの味方
覚えていて
覚えていて
貴方は決して独りじゃない
だからどうか
悲しみの涙を流さないで
夜に眠り 夜に目覚め
夜に生きる世界でも
愛は存在するから……

鈴の音のように澄んだその声は、忙しく過ぎ行く人々の心を、どこか遠慮がちに、しかし力強くつついた。

特別二人に興味を持っていなかったような人々でも、次第に歩く速度が遅くなり、終いには足を完全に止めて、辺り一帯に響き渡る声に耳を澄ませてしまっていた。観客は一人二人と少しずつ増えていき、やがて、ミノリと宵風のまわりにはちょっとした人だかりができている。

しかしミノリは同じ調子で歌い続けた。

観客が大勢いようが一人もいなかろうが、彼女には関係がなかった。

ただ、彼女の仕事は歌うことだった。

歌い手である彼女にとっては、歌が全てであった。だから彼女は歌い続けてきたし、これからもずっと歌い続けていくつもりだった。

一曲目が終わった。そこで彼女は初めて、いつの間にか自分の周りに観衆が大勢いたことに気づく。

慌ててぺこりと頭を下げると、あちこちから拍手が沸き起こった。顔を上げてミノリははにかむような笑顔を見せる。一人二人と観衆がミノリの元に歩み寄り、足元の帽子のなかにコインを落としていつてくれる。ミノリは客がコインを投入してくれる度にいちいち頭を下げ、感謝の言葉を一人一人の客に対してお返しに返した。

チャリン。一際重い音が響いた。

ミノリは驚いて今しがた入れられたばかりのコインを見つめ、そして顔をあげて目の前の客の顔をまじまじと見つめた。

客は、一人の女性だった。腹が大きく膨らんでいて、その腹にそっと自身の右手をあてがっている。

その女性は美しい顔立ちをしていたが、表情はひどく暗く、顔はやつれていて。二人は暫し見つめあった。

「貴女に歌をお願いしたいの」

女性はか細い声で言った。

「鎮魂歌を。あなたなりの歌でいいから」

そこでミノリは驚いた表情をしまいこんで小さく頷き、

「ひとつ伺ってもよろしいでしょうか。どなたへの鎮魂歌なのでしょうかと女性に尋ねた。

女性は僅かに俯き、腹を手でさすりながら答えた。

「夫への。戦争で、命を落とした夫への鎮魂歌を」

分かりましたとミノリはもうひとつ頷き、女性に少し後ろへ下がるよう伝えた。女性が数歩後ろに下がったのを確認すると、彼女は大きく息を吸い込む。そしてまた歌い始める。今度は、先ほどとは違う調子で。先ほどよりも哀愁漂う調子で。歌にありったけの想いを込めて、彼女は詞を紡ぐ。

気がついたら 欠けていた

私と貴方 二人で一つだった

いつの間にか いなかった

私 独りになってしまったの？

でもどうか 安らかに

私 本当は知っているの

貴方にはもう二度と 会えないけれど

貴方はいつでも 私の傍にいてくれると

永遠に刻まれた 私たちの絆

永別によってもそれは 破られることはなく

果てしなく続くメロディーは

私たちを永遠につないでいく

また会いましょう 愛おしいひと

だからどうか 安らかに

また会いましょう 大好きなひと

だからどうか 安心して

永遠のなかに 瞳を閉じて

ミノリは一心不乱に歌った。

女性のために。女性の夫のために。聴いてくれている観衆のために。

そして何より、自分たちのために。

歌っている間は、ミノリは他のことを一切忘れた。ただ、純粋に歌に集中していた。だから彼女の歌は美しかった。だから彼女の歌には力があつた。人を惹きつけてやまない力が。

女性はミノリの歌を聞いている間、ずっと腹を優しく撫でさすっていた。

そのうち顔が段々と俯いていき、最後にはとうとう下を向き、声を押殺して泣き始めてしまった。

しかしそんな女性の様子に、歌っている最中のミノリが気づくはずもなく。

他の観衆もミノリの歌に集中していてそんな見ず知らずの女性が泣いていることになど気づく余裕もなく。ただひとり気づいていたのは、ミノリの傍に忠実に控える、宵風だけであつた。

比較的短い鎮魂歌を歌い終え、一息つくと、また拍手が起こった。

再び帽子のなかにコインが集まっていく。

そこでミノリはふっと顔を上げ、自分に鎮魂歌を依頼した女性の姿を探した。

女性は陰りがあっても美しかったので、すぐに見つかった。彼女はミノリに軽く会釈したかと思うと、その場をさっさと立ち去ろうとしていた。

その頬にきらりと光るものを見た気がして、ミノリは慌てて帽子を拾いあげ、荷物をまとめて彼女の後を追いかけた。腕のなかでコインがちやらちやらと澄んだ音を立てた。宵風がずっとミノリの傍に寄り添った。

「待ってください」

足早に立ち去ろうとしていた女性は、ミノリの声にびたりと足を止めた。そして俯き加減に恐々、といった様子で振り返る。どうやら泣いていたということを悟られたくないようだった。そのことに気づいたが、ミノリは涙に気づかないふりをして女性の元に駆け寄った。

「歌……お気に召しませんでしたか？」

女性はふるふると頭を横に振った。

「いえ……、貴女の歌は、とてもよかったわ」

「それならよかったです。何か不愉快な思いでもさせたのかと」

「そうではないの。ただ、」

何か言いかけて、女性は言いよどんだ。かわりに、誤魔化すように彼女は話題を変えた。

「貴女は何故、路上で歌を歌うの？」

唐突な質問にミノリは一瞬怪訝な顔をした。が、すぐに真顔に戻って即答した。

「ひとびとに夢を与えるため。ひとびとに希望を与えるため。ひとびとの心を慰めるため、です」

ミノリの答えに満足したのかしていないのか、どちらともとれるような曖昧な微笑みを女性はミノリに返した。そしてそのまま踵を返し、立ち去っていく。今度はミノリも引き止めなかった。

遠ざかっていく女性の弱弱しい後姿を見つめながら、ミノリはぼつりと呟いた。

「私、間違っていないよね」

宵風は顔をあげ、ミノリの顔を窺う。今やすっかり見えなくなってしまった女性の後姿の残像を無理にでも見つけようとするかのように、ミノリは目を細めて正面を半ば睨むように見つめていた。

そうでもしないと、立っていられなくなるとでもいうかのように。

少女は強かったが、同時に儂かった。宵風は目を細めて眩しそうに彼女を見つめた後、ミノリが未だに見つめ続けている方向に視線を移した。

「あんさんは何も間違っておりません。あんさんの歌は、ひとに夢や希望を与え、ひとの心を慰める、美しい歌や。それは我が一番よう分かるとる。あんさんは何も疑わずに歌い続けたらええ。我は一生あんさんについていくさかい」

ミノリは何も言わなかった。ただ、宵風の頭をそっと撫でた。宵風は気持ちよさそうに目を細め、ミノリの小さな掌に頭を擦りつけた。

そんな二人を、満天の星空が静かに見下ろしていた。

To be continued

2：歌嫌う村

帽子からはみ出した漆黒の長い髪を風になびかせながら、少女ミノリは長い旅路を懸命に歩いていた。服から覗く透き通るような白い肌は、木々の間から漏れる星空の光を受けて、どこか青白く光るようだった。

狐、宵風の金色の美しい体毛は星の光を受けてきらきらと輝き、ふわふわとした立派な尻尾は時折風を受けて生き物のように膨らんだりしぼんだりした。

気高さを感じさせる風貌をした彼の瞳は、真っ直ぐ前を見つつも周囲への警戒を怠ることはなく、耳がぴくぴくとしきりに動いて周囲の音や気配を慎重に探っていた。彼は、鈍感な少女の頼もしいボディガードであった。

二人は無言で山のなかを歩いていた。山に人気はなかったが、小鳥や栗鼠などの野生の小動物には時折でくわした。

恐らく熊などの大型の動物もいるには違いなかったが、今のところそういった野生動物には出くわしてはいない。

宵風が傍にいてくれるからだろうかとミノリは考えた。他に理由は考えられなかった。彼が周囲を警戒しながら注意深く道を選んでくれているのだ。危険な存在のない安全な道を選んでくれているから、今のところ熊などに遭遇せずすんでいるのだろう。

宵風のおかげで、これまでの旅は順調に進んでいた。と、それまで地面の匂いを嗅ぎながら道を選んでいた宵風が、不意に頭をもたげて空気の匂いを嗅ぐかのような仕草をした。その様子を不思議に思ったミノリが小首を傾げる。

「宵風、どうしたの？」

すると宵風は、

「煙の匂いがするんやわあ。人家が近くにあるみたいやねえ。ミノリはん、もうちよい頑張れるか？」とミノリに視線をちらと投げて問うた。

「あたし、まだまだ元気だよ」ミノリは笑顔でそう返す。無理をしている様子はなかった。先ほど休憩をとったばかりなので、ミノリの体力にまだまだ余裕があるのは確かだった。宵風は満足そうに頷いて、歩みを進める。近くに人家があると分かって、二人の歩調は若干速くなった。

木々の間から、開けた場所が見えてきた。二人はそれを目指して歩いていく。やがて二人は開けた空間に出た。ぽつんぽつんと人家が立ち並ぶ。それぞれの家の小さな煙突から煙が出ている。そこは、小さな村だった。

二人は村をまわってみることにした。本当に小さな集落で、一周するのに二十分とかからなかった。

ミノリは地図を取り出して現在位置を確認してみる。地図にもこの村は載っていなかった。ミノリの地図は古いものなので、最新の地図にはこの村のことも載っているのかもしれない。この村の名を確認する術は、住民に聞くという手段のほかミノリにはなかった。

それまで下を向いていた宵風が、頭を上げて一方向を見やった。

地図をたたんで鞆のなかに押し込みながら、ミノリも彼にならってその方向を見やる。

一軒の小さな家から、一人の男がこちらに向かってやってくるころだった。大柄でたくましい男だ。男はミノリと宵風の前に立つと、二人をじろじろと検分するかのように無遠慮に見つめた。

宵風は不機嫌そうに男を見やったが、ミノリはなるべく敵意をもたれまいとして、不躰な視線に耐えて笑顔でいるように努めた。

「こんにちは」ミノリは明るい声で相手に挨拶した。「ここは、なんていう村ですか？」

男は二人を観察することに飽きたのか、ミノリの言葉に反応を示した。

「ああ。ここは、ヤマトという名の村だよ」

「ここに、宿泊施設はありますか？」ミノリは重ねて問う。これはミノリと宵風にとって大事な質問だった。宿泊施設がなければ野宿ということになるからだ。

野宿用の道具も一応は持っていることだし、最悪の場合、ミノリは別に野宿でも構いはしなかったが、宵風が断固として反対した。

無用心なミノリを外で寝かせるなど、とって食ってくれと言っているようなものだ。野宿は、彼にとっては極力あってはならない事態だった。

「御覧の通りここは小さな村でね。宿泊施設の類はないよ」男は淡々として言った。その言葉は、ミノリと宵風をがっかりさせるのに十分だった。嘆息した二人をどこか面白そうに見つめながら、男は再び口を開いた。「だから、よそ者が来たときは、俺の家に泊めることになっているんだ。勿論、怪しい奴はお断りだがな。お嬢さんは別に危険人物ってわけでもなさそうだし、俺ん家に来るといいよ。その狐も一緒に」

男の申し出に、ミノリはぱっと顔を輝かせた。

「ありがとうございます！ よろしくお願いします」

男はのんびりと笑顔で頷いて、こっちだと顎をしゃくってから歩き出した。二人は辺りをきょろきょろと見回しながら男のあとについていく。本当に小さな村だった。駅などは勿論ない。公共の施設は、小さな郵便局らしきものが一軒あるだけであった。

「名前を聞いてもいいかい」

家に着くと、ドアの鍵を開けながら男がミノリに問うた。名前を聞かれて、泊めてもらうのに名前も名乗っていなかったことに遅まきながら気づき、ミノリは慌てた。なんて礼儀のなつなつなんだと自身を叱咤した。

「名乗るのが遅くなってしまってすいません。私はミノリ、こっちは宵風と申します」

「ミノリちゃんに宵風。変わった名前だな」

俺はタケノリだと男は名乗った。

この村の家々はどこもそうだったが、男の家はこじんまりとしたものだった。一応は木造の二階建てであったが、外から見ると高さは一階建てと大して差はなかった。等間隔にとりつけられたランプが、室内を明るく照らしていた。

ミノリと宵風は二階にある一部屋に案内された。家と同じくこじんまりとした部屋だったが、ミノリと宵風にとっては十分な広さがあったし、何より文句を言える立場にはなかった。部屋のなかにはベッドがひとつと小さな丸テーブルがひとつ、そして椅子が一脚あるだけで、他には家具も置物も何もなかった。殺風景な部屋だった。

「風呂とトイレは一階にあるから。トイレはいつでも使っているが、風呂を使うときは俺に言ってくれ。湯を沸かすから」

「ありがとうございます」

「食事はできたら呼ぶよ」

「はい、ありがとうございます。あの、代金は……」

ミノリが心配そうに尋ねると、男は口元にたくわえた髭を手でいじりながら、

「それじゃ、三べりいただこうかな」とこともなげに言った。

男の提示した金額にミノリは目を見開いた。

「そ、そんな安くていいんですか。確かに私は裕福ではありませんけど、もう少しくらいならお支払いできますよ」
思わずそう言ってしまったミノリを、宵風がどこか呆れたように見やる。

目が、余計なことを言わなければいいのにと言っていた。しかしミノリはそんな彼には構わず、代金を支払うため鞆から財布を取り出し、男に問いかけるような視線を向ける。

男は、微笑んで頷いた。

「もともと、この村に来たよそ者を家に泊めるのは俺の一族の義務なんだ。本来ならば金はとらない方がいいんだが、それじゃ泊まり客に余計な遠慮をさせちゃうだろう。だから三ペリだけいただくことにしてるのさ。だから三ペリでいい。それ以上はいらないよ」

そう言って、ミノリが三ペリ以上手渡そうとするのを制止して、男は三ペリだけしか受けとらなかった。ミノリは恐縮して何度も頭を下げた。

「本当にありがとうございます。あの、ところで、ひとつお聞きしたいんですが。この村で人が集まる場所っていったら、どこになるのでしょうか？」

ミノリの質問に男は不思議そうな表情を浮かべたが、ちゃんと答えてくれた。

聞けば、この村の住人はよく手紙を書らしく、だから郵便局のあたりに一番人が集まるらしい。

道中見た小さな郵便局らしき建物を思い出し、ミノリはそこで歌おうと決めた。その時、男がそういえば、と切り出す。

「ひとつ忠告しておくが。この村にいる間は歌を歌わない方がいいぞ」

男の言葉に、ミノリは必要以上に驚いた。えっ、と大きな声を上げてから慌てて口を押さえる。

が、出してしまった声を元に押し込めることなどできるはずもないので、男に怪訝そうな表情をさせてしまった。

「ど、どういうことですか？ 歌を歌わない方がいいって。私は、歌を歌うために各地を回っているんですが」

今度驚くのは男の番だった。が、男はすぐに真顔に戻ってミノリの肩に手を置いた。まるで聞き分けの悪い子どもを諭すときのような仕草だった。

「お前さん、歌い手か。なら、悪いことは言わない。今日はもう遅いから、一泊して明日の朝になったら、この村をさっさと出ていった方が身のためだ。この村では絶対に歌っちゃいかん」

「何ですか？」

ミノリは困惑した色を顔いっぱい広げて問うた。が、男は首を横に振るだけで、答えてはくれなかった。

男が部屋を出ていくと、部屋のなかはミノリと宵風の二人だけとなった。ミノリは眉ねを寄せたまま鞆を床に降ろし、椅子を引いて腰かけた。

男の言葉が頭のなかをぐるぐると回っていた。歌ってはいけないとは、一体どういうことなのだろうか。この村では本当に誰も歌わないのだろうか。鼻歌さえも？

歌ったことのない人間が存在するなんて、ミノリには信じられなかった。ミノリは勝手に、人間というのは自然と歌を口ずさんでしまう生き物なのだと思いこんでいたが、そうではなかったのか。ミノリには訳が分からなかった。

「ねえ、宵風。一生涯歌わない人間なんて、いるのかな」

暫く悶々と考えてから、自分一人では答えが出ないと悟ると、ミノリは宵風に答えを求めた。宵風は少し思案するような表情をとったかと思うと、首を横に振った。

「まあ、世の中色々な人間がおるさかい、歌を歌わん人間がおってもおかしくないのやろうなあ。我には想像もつかんけど」

「だよねえ」

ミノリはテーブルに肘をついて顎を手の上に寄せながら嘆息した。宵風はそんなミノリの足元にやってくると、そこに腰を下ろした。

「ミノリはん。さっきの男の言う通り、一泊したら早めにこの村でよか」

宵風の提案に、ミノリはぱっと顔を上げた。そして宵風を困ったように見下ろす。宵風はよく表情の読み取れない顔でミノリを見上げていた。彼の瞳には、どこかミノリを試すような色が見て取れた。

「宵風までそんなこと言うの？ やだよ。あたしは、歌いたい。歌を皆に聴いてもらいたい」

歌を心の底から嫌うひとなんているはずがない。ミノリはそう信じていた、いや、信じていたかった。だから彼女は、タケノリには歌わない方がいいと言われても、やはりこの村でも人に自分の歌を聴いてもらおうと決意していたのだった。

彼女は気の弱い少女であったが、どこか強情な一面もあるのだった。

宵風はそんな彼女の返答を聴くと、小さく嘆息した。尻尾を優雅に振り、口を開く。

「あんさんならそう言うやろおと思てたわあ。仕方あらへん、我も付き合うわあ。思う存分歌いい」

ミノリはにっこりと笑った。

次の日、二人はタケノリの家を出ると、郵便局へと向かった。

昨日はほとんど村のなかに人の姿を見かけなかったが、今日はちらほらと住人を見かけた。

小さな村なので、よそ者はすぐにばれる。住人はちらちらと珍しそうに二人を見やる。

そんな視線を全身に浴びながら、二人は郵便局へと無事辿りついた。

郵便局は他の家と大きさはあまり変わらなかった。入口付近にポストが置いてあり、ドアの上に郵便局、と書かれていなければ、ミノリたちにはこの建物が郵便局だとはとても思えなかったことだろう。

ミノリは胸をどきどきさせながら鞆を足元に置いた。そして脱いだ帽子もひっくり返して地面に置き、何度か大きく深呼吸した。

歌ってはいけないという村で歌を歌うとどうなるのか、予想がつかなかった。

厄介なことにならなければいいが、と思い、同時にそう思うなら初めから歌わなければいいのにとミノリは自嘲した。

宵風はミノリの足元に腰を落ち着けて周囲の様子を注意深く窺っている。タケノリの言う通り、郵便局には人が行ったり来たりし、他の場所に比べて人通りが多いようだった。郵便局前で立ち話をしている奥さん連中もいる。行きかう人々は、ミノリたちに無遠慮な視線を向けて、この少女がこれから一体何を始めるつもりなのかと好奇の表情を浮かべて様子を窺っていた。

初めて路上で歌ったときのような緊張感を抱きながら、ミノリは腹のあたりで両手を握り合わせて、すうと息を吸い込んだ。その途端、周りの空気が一瞬にして変わったような気がした。宵風の目が鋭くなった。

ねえ聞いて 私の声を お願いだから

いつも振り向いてくれない貴方に

どうしても伝えたいことが……

「歌だ！」

誰かが叫んだ。と、周りの人々が口々に歌だ、歌だと叫び始めた。

非難に満ち溢れた声だった。ミノリは怯えて歌うのを中断した。しかし、周囲の人間の非難がやむことはなかった。

非難の的は、当然のことながらミノリであった。敵意むき出しの声だった。ミノリはおろおろと不安げに視線をめぐらした。今や周囲の人々は皆、ミノリを睨みつけていた。先ほどの好奇の視線の方が余程ましだったとミノリは感じた。

と、何かが足元に飛んできた。

見ればそれは小さな小石だった。ひとつ、またひとつと飛んでくる。

いくつかが、ミノリの華奢な身体に直撃した。ミノリは慌てて帽子を拾って深く被り、鞆を持ち上げて盾としながらその場を離れた。

宵風が周囲の人々を威嚇するように、歯をむき出しにして低い声で唸りながら彼女の傍に付き添った。しかしそれでも人々はミノリに石を投げ続けた。

流石に追いかけてはこなかったが、ミノリが建物の影に隠れて姿が見えなくなっても、村の住人たちは石を投げていた。

はあはあと荒い息をつきながら、ミノリは家と家の間の狭い隙間に取まって地面に屈みこんだ。

鞆をぎゅっと抱きしめ、両目を硬く瞑る。宵風が心配するようにクーンと鳴いた。

少女は笑おうと試みたが、上手く笑うことができなかった。

全身が震えていて、震えを止めようと鞆を抱きしめる力を強くしたところで止まらなかった。

我慢していたが、心配そうな宵風を見やった途端、涙が両目から溢れてきた。

こんなことで泣くな。

こんなことで泣くようじゃ、人前で歌を歌うなんてできやしない、とミノリは自分を叱咤したが、それでも涙はあとからあとから溢れてきて、止まらなかった。

怖かった。

悔しかった。

自分の歌はまだまだなんだと思い知らされた。

ミノリは声を押し殺して泣いた。宵風はしばらく思案するように彼女を見つめていたが、ふと思いついたように身体をぶるんと振るわせると、人型になって彼女をそっと抱きしめた。

ミノリは宵風の腕のなかで鞆をぎゅっと抱きしめながら、嗚咽をもらした。そんなか弱い彼女の体温を腕のなかに感じながら、宵風は眉を顰めた。

「私の大切な姫さんこんな泣かせて……この村の奴ら、絶対許さへん」

ぼそりと呟いた宵風に、ミノリは一瞬ぎくりと身体を強張らせて彼を見上げた。

「よい、て。村の、人には、何も……しないで、ね？」

「……分かったわあ」

ミノリの訴えかけるような視線に、宵風は渋々頷いた。ミノリは暫く疑うように彼を見上げていたが、その間もずっと涙はとめどなくあふれ出していた。

ミノリは暫く宵風の腕のなかで泣き続けた。宵風はそれ以上何も言わず、ただ黙って彼女の今にも壊れそうな身体をそっと抱きしめ続けていた。

と、不意に宵風が顔を上げ、辺りをきょろきょろと見回した。そして仕方なし、といった様子でミノリからそっと離れ、元の狐の姿に戻る。

急に離れたぬくもりに、ミノリは不思議に思って宵風を見た。彼はミノリを見ていなかった。彼の視線の先を辿ると、一人の老人がこちらに向かって頼りない足取りで杖をつきながら歩いてきていた。

ミノリは少し身体を強張らせたが、逃げようとはしなかった。不思議と、その老人からは敵意のようなものは感じられなかったからだ。

宵風も威嚇の声をあげることはしなかった。ただ、じっと近づいてくる老人を見つめていた。

老人はミノリと宵風の前まで来ると、震える右手をついと突き出した。

何かを握り締めているのか、その皺だらけの右手は拳を作っていた。ミノリは不思議に思ってそれを見つめていたが、右手がまたついと差し出されたので、ようやく老人の意図を悟って両手で器を作って老人のこぶしの下に手を持っていった。

ミノリの白い小さな掌で作った受け皿に、ぼとりとコインが一枚、落とされた。ミノリは掌の上のコインと老人の顔とを交互に見つめた。老人の意図が図りかねた。

「歌を一曲、お願いできますかの」

震える身体に似合わずはきはきとした口調で、老人は言った。老人の瞳は、柔和だった。ミノリは驚いて彼を見つめ返した。

「でも、この村では、歌は禁止されているんじゃないか、」

「歌を一曲、お願いできますかの」

老人はもう一度言った。

「ここではなんですから、わしの家で。ついてきてくださるか？」

老人の声は、ひたすらに優しくかった。ミノリは流れる涙をそのままに、驚いた表情のままこくと頷いていた。

「ここ……」

老人に案内された家は、昨夜ミノリと宵風が泊まった、タケノリの家だった。

驚きながらも促されるまま敷居をまたぐと、入ってすぐの食堂にタケノリがいた。タケノリはミノリの顔を見て、今や涙はとまっていたが、目が赤くはれているので泣いたことが分かったのだろう、驚いた表情で座っていた椅子から立ち上がった。

「じいさん、ミノリちゃん、どうしたんだい」

「彼女に歌を頼んだのじゃ。地下で歌ってもらおうではないか」

タケノリの問いには答えず、老人はなんでもないとを言うような調子で言った。老人の言葉に驚いたのか、タケノリは更に目を丸くした。

「じいさん。掟を忘れたのかい。この村では歌を歌ったらいけないんだぜ」

「そんなものは知らん。わしはとにかく、彼女の歌が聴きたいんじゃないか。ほれ、地下室の鍵を貸せ、タケノリ」

タケノリはまだ驚いてはいたが、やれやれ仕方ないといった風に肩をすくめると、ズボンのポケットから鍵の束を取り出して老人に手渡した。

老人はそれを受け取ると、震える手で目当ての鍵を探し出し、ミノリと宵風に、ついてこいともいうように視線をやると、階段を下りていった。ミノリは慌てて彼の後をついて階段を下りた。タケノリも興味がそそられるのか、ミノリと宵風の後からついてきた。

階段を下りると一枚のドアが突き当たりであった。老人はドアの前に立つと、鍵穴に鍵のひとつを差し込んだ。ガチャリと音がして、ドアが開く。

ドアを開いて中に入ると、老人は入口付近にかけられていたランプに灯りを灯した。全部で四つあるランプ全てに慣れた手つきで明かりを灯していく。

老人に続いてなかに入ったミノリと宵風は、珍しそうに首をめぐらして部屋を見渡した。部屋には、グランドピアノやらギターやらフルートやら、ありとあらゆる楽器が所狭しと置かれていた。しかしどれも埃をかぶっていた。相当長い年月触れられていないようだ。

「この部屋は防音加工がなされておるから、ここなら歌っても外には聴こえんじゃないだろう」

老人は満足そうにそう言って、グランドピアノの椅子を引いて注意深くそこに腰掛けた。

「タケノリ、ドアを閉めなさい。さあ、お嬢さん。わしに歌を聴かせてくれんかの」

老人の声に、口をぽかんと開いて無数の楽器を眺めやっていたミノリは慌てて居住まいを正した。そして頷いて鞆を床に下ろし、宵風に一瞬目配せをして、息を思い切り吸い込んだ。空気は埃っぽかったが、ミノリは嬉しかった。

ねえ聞いて 私の声を お願いだから
いつも振り向いてくれない貴方に
どうしても伝えたいことがあるの
貴方は この歌が嫌いだといったけれど
よく聴いてみて
ほら 本当はいい歌でしょう
貴方何も分からずに毛嫌いしていたの

どんなものにも意味がある
どんな行為にも意味がある
貴方 結果が出ないからって
すぐに投げ出す癖があるけど
続けていれば 必ず結果はついてくるから
必ず意味があるから
どうかそう簡単に 諦めないで

歌を嫌う村にいるということも忘れて、ミノリは心を込めて懸命に歌った。

ミノリの声は、それ程広くない地下室のなかで、歌に飢えた老人とタケノリの心に染みわたった。それはまるで、乾いた大地に水が染みこむように。ミノリの澄んだ歌声は、二人の心の乾きを癒すのには十分だった。

ミノリが歌い終わると、二人は自然と拍手をしていた。二人の拍手を受け、ミノリが照れたように微笑んで頬をかく。そんなミノリを、彼女の足元で宵風が微笑ましそうに見つめていた。

やっぱり、ミノリは歌を歌っているとき一番輝いているのだと宵風は心のなかで確信していた。

「素敵な歌をありがとう、お嬢さん」

老人が椅子に腰掛けたまま言った

「この村の者たちにも、聴かせてやりたいものだ」

「あの、そのことなんですけど」とミノリが真剣な表情になって一歩前に踏み出した。

「この村ではどうして歌を禁止しているのですか？」

ミノリの言葉に、老人とタケノリは顔を見合わせた。

ミノリに話した方がいいのか話さない方がいいのか、判断がつけられないようだった。

それは、歌を禁ずる原因が、今となっては村にとって忌まわしい思い出話となっているからだった。

しかしタケノリと顔を見合わせた老人は、意を決したようにひとつ深く頷いた。タケノリは若干不安そうに老人を見やったが、老人の考えに逆らうつもりは彼にはないようだった。

「随分と昔の話だが」老人は杖に両手を預けて語り始めた。

「この村には一人の歌い手がいた。若く美しく、歌の才に恵まれた歌い手でな、彼女は暇さえあればずっと歌を歌っていた。

彼女が歌うと、村中の者が皆手をとめて彼女の歌に聴き入ったものだった。村中の者たちは皆彼女を尊敬すると同時に愛していたものだ。

ある日、村に一人の負傷兵がやって来た。この村にたどり着いた頃には息も絶え絶えで、今にも命のともし火が消えてしまいそうなくらいひどい怪我を全身に負っていた。

彼は敵国の兵士だと村の者たちにはすぐに分かった。だがこの村の者は皆善良で寛大だったから、敵国の兵士といえど見殺しにすることはできなかった。

村の者はこの負傷兵を熱心に介抱した。特に熱心だったのが、村の者皆に愛されていた歌い手その人であった。彼女は一日中負傷兵に付き添い、兵士の看病をした。朝から晩まで、他のことはそっちのけで彼女は兵士を介抱した。

彼女が甲斐甲斐しく世話をしたこともあって、兵士の具合は次第に良い方向に向かっていった。

兵士が立って歩けるようになった頃、仲良く並んで村のなかを歩く二人の姿がよく見られるようになったものだ。

本当に二人は仲がよかった。お互い敵国の者同士だったから、決して結ばれてはならないということは彼女を含めた皆が分かってはいたことだが、いつの間にか彼女は敵国の者同士だという関係を忘れてしまうくらい、兵士を愛してしまっていたのだ。

兵士もまた彼女を愛していた。傍目から見てもよく分かるくらいに、二人はお互いを深く愛していた。見ているこちらが不憫に思ってしまうくらいに。

だが、やはり二人は結ばれてはならない運命にあった。

兵士は自分の国に戻らなくてはならなかった。二人は別れざるを得なかった。

あれは、本当に哀れなものだったよ。こんな辛い別れがこの世にあっていいのかと誰もが二人を不憫に思った。

兵士が村を去ってしまってから、彼女の様子がどこかおかしくなった。仕方がないことだったのだろうな。身が引き裂かれるような思いを彼女は味わったのだから。

彼女は一日中狂ったように歌い続けた。彼女が眠っているとき以外は、彼女の歌声が聴こえないときはなかった。彼女の狂った歌声が村に響き渡る日々が数日続いた」

ここで一旦老人は言葉を切り、ひとつ深呼吸をした。

「丁度兵士が立ち去ってから一週間が経った日の深夜、彼女は村中に火をつけてまわった。

彼女の姿を見た者が言うには、手当たり次第に、狂ったように歌い続けながら彼女は家々に火をつけてまわったという。

彼女から火を奪っても、彼女は火を燃え盛る家から調達して火をつけてまわったそうだ。

火災を知らせる警鐘が鳴った頃には、火は村をすっかり包み込んでいた。慌てて魔法使いを呼んで消火活動にあたったが、火が完全に消える頃にはほとんどの家が全焼し、何人ものひとの命が失われた」

老人はミノリの星空のような瞳をじっと見つめた。ミノリは真剣な表情で彼を見つめ返していた。

ただ、彼女の内心ではひとつの思いが渦巻いていた。しかしそれを口に出して言うことは、老人に対しても、この村の住人に対しても、失礼にあたるような気がして、彼女は自分の思いを言葉にすることができなかった。

「彼女もまた、燃え盛る家のうちの一軒に飛び込んで焼死した。彼女は火をつけてまわる前の数日間、そして火をつけてまわる際も狂ったように歌い続けていたという。そういうことがあって、この村では歌は不吉なものとするようになったのだ」

ミノリは眉間に皺を寄せて少し俯いた。俯くと、足元の宵風と視線がぶつかった。宵風は心配そうにミノリを見上げていた。

「すまんの。だからこの村の者たちは歌が嫌いなのだ。だからお前さんはこの村から早く立ち去った方がいいだろう。途中まではタケノりに送らせよう」

そう言って老人は椅子から腰を上げた。ミノリは慌てて顔をあげ、老人とタケノリに対して首を横に振った。

「大丈夫です。宵風がいますから、道に迷うことはありません。二人でこの山を降りることができます。お話を聞かせてくださって、そしてお家に泊めてくださって、本当にありがとうございました。お世話になりました」

タケノリは暫くミノリたちを山のふもとまで送ると主張したが、ミノリはその申し出を丁重に、しかし断固として断った。

終いにはタケノリと老人も渋々納得し、かわりに握り飯を作ってお弁当としてミノリに持たせてくれた。タケノリの家を出るとき、ミノリはそれをありがたく受け取り、まだ遅い時間にならないうちにと急ぐようにして小さな村を後にした。

幸いにも、村のほかの住人たちに姿を見られることはなかった。

ミノリと宵風は暗い山道を下っていった。時折小鳥や栗鼠たちがミノリたちの前に現れたが、大きな野生動物に遭遇することはなかった。

ミノリはずっと口を真一文字に引き結んで、先ほどの老人の話を頭のなかで反芻していた。

彼女の胸の内では、もやもやとした扱いづらい思いが渦巻いていた。彼女はその思いをどうしたらいいものか、図りかねていた。宵風が口を開いたのは、そんな時だった。

「さっきの話やけど、」

ミノリが反応したのを確認して、宵風は続けた。

「一人の歌姫が氣い狂って火つけてまわったからって、歌を憎む理由にはなっとらんと、ミノリはん、思うてはるやろお」

凶星だったので、ミノリはこくと頷いた。宵風はそんなミノリをいつくしむように見やって、寂しそうに呟いた。

「確かに私もそう思う。けどな、村のひとたちは、そうせざるを得なかったんやと、我はそうも思うんよ」

どうということかと目で問いかける。宵風は周囲に気を配りながらも、ミノリの疑問にきちんと答えてくれた。

「多分、村のひとは皆、その歌姫を愛しとったんよ。そんで、兵士と歌姫を心の底から不憫に思とったんやろうなあ。でも山村では火災は憎むべき対象や。ひとは弱い生き物やさかい、何かに罪をなすりつけずにはおられへんかったんやろお。だから、あの村のひとたちは歌に罪をなすりつけた」

「そんなの、勝手だよ。歌は何にも悪くないのに」

ミノリは眉間に思い切り皺を寄せて唇をかみ締めた。

悔しかった。悲しかった。

彼女にとっては歌が全てなのに、その全てをあの小さな村に全否定されたのだ。

それがミノリを惨めな気持ちにさせていた。宵風はミノリに視線を移して、慰めるように小さく鳴いた。

「我も勝手やと思うけどな。生き物とはそういうもんや。ミノリはんや我も含めて、生き物とは勝手なもんや」

あともうひとつ気づいたんやけどな、と宵風は続ける。

「大方その歌姫は、あのじいさんの家族かなんかやったんやろうなあ。タケノリとやらが、自分の一族はよそ者を家に泊める義務がある言うてたやろお。きっと、それで罪償いしとるつもりなんやでえ」

そうなのかもしれない、とミノリは思う。もしかしたら違うのかもしれないが、それはミノリにとってはどちらでもいいことであつた。彼女にとって重大なのは、歌を歌えるか否かということだけであつた。

「次の場所では思う存分歌いい」

ミノリの心中を思いやった宵風が言った。ミノリはかすかに頷き、頭上を見上げた。木々の間から覗く漆黒の空には、数え切れないほどたくさん星が、ミノリを励ますかのようにきらきらと輝いていた。

To be continued

3：歌い手になった男

ミノリは愛らしい顔で狐を見つめ、輝くような漆黒の長い髪を櫛でとかしながら、鼻歌を歌っていた。

金色の体毛を持つ狐の宵風は、不機嫌そうにふわふわとした尻尾を左右に揺らしながら、狐火を使って、集めてきた小枝や枯葉に火をつけようと試みていた。

小枝はしけていたので、火はつきにくかった。しかし何度か試していると、火はようやくついた。

小さな焚き火が二人を照らした。

「ふう、やっとついたわぁ」と宵風は疲れたように言って、腰を下ろした。後ろ足で耳の辺りを掻き、目を細める。その様子を見てミノリが、

「ご苦労様、宵風。ブラッシングしてあげようか？」と尋ねると、

「ほんなら頼むわぁ」と宵風は腰をあげてミノリの横に行き、ミノリに寄り添うようにしてその場に伏せた。

ミノリは微笑んで自分の櫛を鞆に直し、かわりに宵風用の茶色いブラシを取り出して、宵風のふわふわの体毛にそっと当てる。そのまま、頭の方向から尻尾の方へとずっとブラシを動かした。ブラシは途中で引っかかることなく、流れるように金色の体毛の上を滑っていく。ミノリはまた鼻歌を歌いながら、ブラシを優しく滑らかに動かした。宵風は気持ち良さそうに目を細めた。

「それにしても、」と宵風は身体を動かさないように気をつけて頭だけ捻ってミノリを見上げた。「野宿になってしもうて。道選びに失敗してしもうたなぁ」

ミノリは楽しそうにブラッシングを続けながら宵風にちらと視線を落とした。

「たまには野宿もいいと思うよ。宿に泊まるのと違って、星空の下で直接眠るのは楽しいし」

お金もかからないし、とつけたす。ミノリが野宿をあまり嫌がらないのは、お金がかからないという理由からだった。野宿が危険だということは頭では分かっているのだが、彼女は宵風がいるのですっかり安心しきってしまっていて、自分が危険な目に合うことなどこれっぽっちも危惧してはいなかった。

そのことを分かっているだけに、宵風はあまり野宿をしたくないのだった。

こんな警戒心の全くない娘など、格好の標的になるに決まっている。

ミノリ一人を守れないほど自分が弱いとは思っていないが、万一のことを考えて、宵風は極力野宿を避けていた。

しかし今回は、野宿を避けることができなかった。一番近くの村までに大分距離があったのだ。

既に一日、ミノリと宵風はほとんど睡眠をとらずに歩き続けている。ミノリは鼻歌を歌うなどして元気なことをアピールしているが、彼女がすっかり疲れきっているのは、宵風にははっきりと分かった。

この世界ではずっと夜が続くのでいつ野宿しても危険なことには変わりはない。宵風はブラッシングをしてもらって寛ぎながらも、周囲に注意を払うことに余念はなかった。

「はい、ブラッシング終わり」

そんな宵風の気苦労も知らず、ミノリが暢気にブラッシングの終了を告げた。宵風は立ち上がって、大きく伸びをした。

「おおきに。気持ちよかったわぁ」

そう言ってから、身体をぶるんと振るわせて人型になる。ミノリは、鞆を探って寝袋の準備をしながら、不思議そうに首を傾げた。

「どうしてわざわざ人型になるの？」すると宵風は、

「こっちの姿の方が虫を寄せ付けんさかい」と言って笑みを浮かべた。

ミノリは怪訝な表情をしたが、それ以上聞くことはしなかった。ふうんと適当に相槌を打って、鞆から取り出した寝袋を広げる。「でも寝袋はひとつしかないよ」とだけ言い添えた。

「ミノリはんは気にせんでええから、寝袋に入っちはよ寝え」

宵風にちらちらと視線を向けていたミノリにそう言って、宵風は肩膝をたてて焚き火の傍に座った。

枝をつついたり足したりして少し火を強くする。小枝のステージの上で炎が赤々と踊り、煙がもくもくと立ち上った。木々の隙間から星空が垣間見えた。

ミノリは宵風の言葉に素直に従って、気になる素振りを見せつつも寝袋のなかに入った。チャックを上まで引き上げ、温かい布にすっぽり包まって仰向けになる。木々で小さく切り取られた星空が、ミノリを優しく見下ろしていた。宵風は寝袋のチャックを端まで上げてやり、ミノリの頭をいつくしむようにそっと撫でた。

「ほんなら、おやすみ。いい夢見いや」

「うん、おやすみ、宵風。宵風もちゃんと寝るんだよ」

ミノリの言葉に宵風は微笑んで頷いた。ミノリの目は既にとろんとしていて、言葉の終わりの方は蚊の鳴くような小さな声になってしまっていた。ミノリは睡魔に抗うことなく、易々と降伏した。

辺りはひどく静かだった。ぱちぱちと炎のはぜる音が唯一静寂を破る音だった。宵風は暫くミノリの安らかな寝顔を、微笑みを浮かべて見つめていたが、ひとつ大きな欠伸をして、ミノリの傍にごろんと横向きに寝転んだ。肘をたてて手の上に頭を乗せる。その姿勢で、宵風はうつらうつらとし始めた。

ぱきん、と小枝の折れる小さな音がして、宵風ははっと目を開けた。素早く起き上がって周囲に目を凝らす。耳を澄ませて物音がしないか気配を探る。夜の闇に感覚が研ぎ澄まされていくような気がした。

と、ぱきん、とまた小さな音がした。続いてガサガサと茂みが揺れる音。宵風の目の前で、小さな茂みが揺れた。宵風はミノリを庇うような姿勢で茂みの方に意識を向ける。ミノリは小さく寝息をたてて眠りこんでいた。

茂みからぬっと男が現れたのを見て、宵風は警戒心を露わにした。鋭い視線を男に投げかけ、威嚇する。男はまず焚き火に目をむけ、続いて宵風と、宵風の傍らで眠りこんでいるミノリへと視線を順々に移して、大またに近づいてきた。宵風は更に威嚇したが、男は全く気にしていない風だった。

「すいません、よければ、一晩ご一緒させていただけませんか」

男は宵風に遠慮がちに言った。無精ひげを生やし、大きな目をした男は、どこか頼りなさ気な風貌をしていた。しかし宵風に伺いつつも、男は既に焚き火を挟んでミノリと宵風の向い側に荷物を降ろして腰を落ち着けていた。宵風は少し警戒を解いて、男を呆れたように見やった。

「いいですか聞いといて、あんさん、とっくに一緒しとるやん」

「いや、すいません。一人では火を起こせなかったもので」

大きな荷物から何か袋を取り出し、その袋から更に乾パンを取り出してかじりながら男は言った。頭を少し下げ申し訳なさそうな顔をつくったものの、本人はいたって寛いでいた。男から危険なにおいはしなかった。だから宵風は警戒を少し解いて、濁りのない瞳で男を観察した。

男は三十代そこそこといったところだろうか、長いごわごわとした髪を後ろで一まとめにしており、薄汚れた旅装束を身につけていた。

真っ黒な瞳は大きく、ほりが深く印象的な顔立ちをしている。ついでに言えば鼻も高くて唇は薄い。

なかなか端正な顔立ちをしていた。

宵風が視線を男から男の荷物に向けると、宵風の目にギターが飛び込んできて、宵風の関心は完全にそちらに移った。宵風の視線に気づいたのか、男がもぐもぐと口を動かしながら、鞆から覗くギターに目を向けた。

「ギター……あんさん、歌手か？」

「ええ、これでも一応は」パンを飲み下しながら男は頷いた。鞆から水袋を取り出し、ごくごくと喉を鳴らして飲む。そして蓋をしめて鞆に水袋を戻しながら、男はミノリに視線を向けた。少女はあどけなさの残る寝顔ですやすやと寝入っていた。

「可愛いお嬢さんですね。お二人で旅を？」

宵風はミノリの額にこぼれかかった髪の毛をそっとかきあげてやりながら頷いた。

「兄弟……ではありませんよね。恋人ですか？」

「……何でそう思いはったん？」

ミノリの寝顔を見つめたまま宵風が問うと、男は微笑んで二人を見つめながら答えた。

「あなたの、彼女を見る目つきが、とても柔らかで優しくて、それでいて甘いからです。余程彼女のことが大切なんですね」

宵風はちらと男に視線を移してから、またすぐにミノリに視線を落とした。

何も知らずに少女は穏やかな寝息を立てて眠りこんでいる。余程歩き疲れていたのだろう。小さな声とはいえ、会話が交わされているのに起きる気配は全くない。宵風は曖昧な笑みを浮かべて男の質問には答えなかった。

沈黙が降りた。男は眠っているミノリを気遣うように、音を立てぬよう慎重に動きながら鞆から上着を取り出し、横になって自身の上に上着をかけた。

腕を組んで頭の下にひき、木々の隙間から覗く星空を見上げる。宵風も男につられて、ミノリから星空へと視線を移した。ちっぽけな光が、きらきらと一生懸命に輝いていた。それが星たちの仕事だと言わんばかりに、堂々と輝いていた。ミノリもあれくらい堂々として歌えるようになればいいのにと宵風は心のなかで思った。

辺りには何の気配もしなかった。もともとこの辺りの治安は悪くはない。だから宵風はこの道を選んだし、ここでの野宿を認めたのだが。

しかしそれにしても野生動物の類が現れることがないのが不思議だった。永遠に夜が続くと、睡眠のタイミングがずれる。人は時計があるので朝の時間に目覚め、夜の時間に眠るというリズムを守っているのだが、野生動物の場合はそうではない。好きなときに眠り、好きなときに目覚めるというのを続けている。だから、こうして人間が眠る時間帯に起きている野生動物がいても全然おかしくはないのだ。

しかし野生動物の気配が全くしない。宵風は星空を見上げながらも神経を研ぎ澄ませ、周囲の気配を探っていた。

「ひとつ、話を聞いてもらえませんかね」

唐突に男が声を発したので、宵風は気配を探るのを中断した。視線を男に移すと、男は寝転んで星空を見上げたままの姿勢でいた。一瞬、今の言葉は空耳だったかと思われたが、男が宵風に目を向けたので、やはり男が宵風に頼みごとをしたのは間違いのないようだった。

「どうぞ」

欠伸をかみ殺しながら宵風は言った。眠気覚ましに丁度いいかもしれないと思ったのだ。男は感謝の意を述べると、ひとつ昔話を始めた。

昔、ある町に男がいた。男は勤勉でよく働いたから、高名な教授に気に入られ、舎弟となることができ、将来もそれなりに有望だった。男には恋人がいた。同い年で、美しい娘だった。二人は互いに深く愛し合っていたし、周りの人間も二人の仲を祝福していた。二人は結婚の約束もしていた。

しかし娘は、重い病気にかかっていた。それは遺伝性のもので、手術を受けても助かる可能性は六パーセントほどしかないといわれる難病だった。だが、誰もが娘は助かると信じていた。それは、男も同じことだった。だから男は、娘に結婚の誓いを立てた。二人はめでたく結ばれることとなった。

誓いを立てた次の日が、娘が手術を受けることになっていた日だった。

手術は予定通り行われた。誰もが娘が元気になることを信じて疑わなかった。少しでも疑えば、娘が助かる可能性がなくなってしまうとでもいうかのように、皆が心から娘の回復を信じた。

しかし、娘は六パーセントの奇跡を起すことはできなかった。娘は儚く星空へと散ってしまった。

愛する者を失った男は絶望した。男は酒におぼれて働かなくなった。教授は男に暇を言い渡した。男はますます絶望した。

誰も男を救ってくれなかった。最初は男に同情を示した者は何人かいたが、男があまりにも悲嘆にくれてるので次第に誰も男に寄り付かなくなっていった。男は更に嘆き悲しんだ。負の連鎖だった。

ある日、男はいつものように閉店時間を過ぎても飲み屋にいて、店から無理矢理追い出された。

男はよろける足取りでふらふらとあてもなく歩き、やがて転んで地面にうつ伏せになった。頭のなかがふわふわと宙を漂うような感覚があり、身体は軽いようで重かった。泥酔しているせいで周囲の状況がよく分からず、自分がどこにいるのかも定かではなかった。

男はごろんと寝返りを打って仰向けになった。道行く人々は、道の真ん中に大の字になっている男を迷惑そうに見やりながらも彼を大きく避けて通っていった。

男の目には満天の星空が映っていた。星空は、いつも美しかった。男は無意識のうちに右手を伸ばし、星を掴むような仕草をした。が、当然のことながら星を掴めるはずもなかった。手は空しく虚空をかいた。

高いなあ、と男は呟いた。空は、あんなに遠いところにあったのだろうか、と男は酔って正常に働かない頭で考えた。そんな時、声が聞こえた。いや、声ではなかった。それはメロディーを持っていた。それは歌だった。

男はむくりと起き上がって辺りを見回した。周囲には、歌を歌っている人間などいないようだった。道行く人々は男の耳に届くメロディーを気にした風もなく、平然と自分の道を歩いていく。その歌は、男にしか聴こえていないようだった。男はまるで歌に吸い寄せられるかのように立ち上がり、ふらふらと歌が聴こえてくる方角へ向かって歩いていった。歩いていくにつれ、歌がはっきりと聞き取れるようになってきた。

何度か角を曲がり、歩いたところで、歌の主が見つかった。男は驚愕に目を見開いた。

何度も目を擦った。しかし、目の前の娘の姿が変わることはなかった。

その娘は、腹の前で両手を組んで、一生懸命に歌っていた。少女の背後で噴水がしぶきをあげていた。細かいシャワーを背中に浴びながら、娘は歌っていた。間違いようがなかった。娘は、男の亡き婚約者の姿をしていた。

男は呆然としてその場に突っ立っていた。すると、娘は男に気づいたのか、歌い続けながらも男の方に顔を向け、にこりと微笑んだ。

男は微笑み返そうとしたが、顔がすっかり強張ってしまって、うまく笑顔を作ることができなかった。少女は気にした風もなく歌い続け、再び正面に顔を戻した。少女の声が、明確な意味を伴って、男の耳からすっと飛び込んできた。

忘れないで 忘れないで 僕のこと
大切なひと 僕は君のすぐ傍に
だから 大事にして 君の“今”
一瞬一瞬が奇跡なんだと気づいて

男は娘に近寄り、彼女の前に膝をついて頭を垂れた。娘は驚いて歌を止め、男を見下ろした。

彼女は慌てて男に立つよう促したが、男は首を横に振って頭を垂れ続けた。男の目には、彼女がまるで聖女のように映っていた。いや、実際に男にとって、彼女は聖女だった。

星空の元へ行ってしまってもまた、男のことをこうして心配して地上に一瞬ではあっても戻ってきてくれたのだと、男には分かったからだ。

男は彼女に心から感謝した。彼女を力いっぱい抱きしめたかったが、彼女は触れた瞬間に消えてしまいそうなほど儂かった。だから男は彼女に触れるのを躊躇った。

男は流れる涙をそのままに、顔を上げた。娘は生前と変わらず美しかった。美しい娘は困ったように微笑んで男を見下ろしていた。その顔が、まるで聖母のように男の目には映った。

男は彼女に触れる代わりに、今しがた彼女が歌っていた歌を教えてもらった。酔った頭では覚えることができなかった。歌詞を紙に書いてもらい、メロディーは何とか口ずさんで覚えた。

彼女の足元に座り込んで歌を口ずさんでいるうちに、男の意識は段々とぼやけてきた。彼女といられる時間を一秒たりとも無駄にはしたくなかったが、襲ってくる眠気には抗えなかった。結局、男はその場に眠りこんでしまった。

男が目を覚ますと、娘の姿はどこにもなかった。辺りを見渡すと、見知らぬ人間が歩いているだけだった。予想していたことなので、男は別段驚かなかった。だが、胸の辺りがひどく痛んだ。

男は手に握り締めていた紙を広げた。紙には、娘に教えてもらった歌詞が敷き詰められていた。メロディーを口ずさんでみた。簡単なメロディーだったので、酔った頭でも覚えることができたようだった。男は歌を口ずさみながら夜空を見上げた。ひとつの星が、きらりとウインクするように瞬いた。男にはその星が、自分にとって大切な少女であるかのように思われた――

「そのことがあって以来、男は歌を練習するようになりました。そうして、彼は歌手となったのです」

焚き火のはぜる音がしていた。宵風はミノリの寝顔に視線を移し、彼女がまだぐっすり眠っていることを確かめると、再び男に視線をやった。

男はぼんやりと火を見つめながら、遠い過去へと思いをはせているようであった。彼の手のなかで、すっかり黄ばんでしまった紙がかさりと音をたてた。

遠い目をしていた男は、やがて焦点を現在に合わせると、腕にはめた時計を見やった。それからちらとミノリに目を向け、柔らかく微笑んだ。

「そろそろお暇しましょうかね。休憩もできましたし、次の町まで大分ありますから、私はそろそろ出発することにしませう」

ご一緒させていただいて、ありがとうございました。男はそういつて宵風に深く頭を下げると、立ち上がって鞆を担いだ。そして宵風が何かを言う前にさっさとその場を立ち去ってしまう。

出会いも別れも、ひどくあっさりしたものだった。

宵風は男が消えた先をしばらくぼうっとして見つめていた。

頭のなかで、今しがた聞いたばかりの話を回想する。あれは、どのくらい前の話のことなのだろうかと考えをめぐらせていると、ミノリが身じろぎをした。宵風がはっとして視線を向けると、ミノリが眠そうに目を擦りながら宵風を見上げていた。

「ミノリはん、起きなはったんやなあ。もうちょっと眠っても大丈夫やのに」

ミノリはチャックを引き降ろして上半身を起し、腕を伸ばして大きく伸びをした。乱れた髪を手ぐしで直し、宵風に笑いかける。眠そうな顔をしているが、もう一度眠る気はないようだ。

「もう大丈夫。なんだか、懐かしい夢を見ちゃって」

ミノリの言葉に宵風が首を傾げた。

「懐かしい夢？」

うん、と言ってミノリは寝袋のなかに座ったまま、星空を見上げる。宵風もつられて星空を見上げた。きらきらと輝く宝石は、いつでも美しかった。

「昔、ね。宵風と出会う前のことなだけけど。私、一人で旅を始めたばかりだったの。その時、ある町で歌っていたら、一人の男の人がやって来て。足がふらついてたから、多分酔っ払ってたと思うんだけど。その人がね、いきなり私の前にきて膝をついて懺悔するような姿勢になって。びっくりしちゃった。おまけに、今歌っていた歌を教えてくれてすごく真剣な様子で言うから、あたしもつい真剣になって教えちゃって」

ミノリは懐かしそうにくすりと笑った。

「そのうちその男の人がその場で眠りこんじゃったから、あたしはその間に酔い冷ましの薬を貰いに行ったの。あんまりひどく酔ってたみたいだったから、早く正気に戻してあげようと思って。で、薬と水を持ち帰った頃には、男の人はいなくなっちゃってたんだけど」

ミノリは微笑を浮かべて星空を見ながら嘆息した。

「あの人、今頃どうしてるのかなあ。元気にしてるのかなあ。酔っ払って道端で眠りこんでいなきゃいいけど」

「きっと、どこかで歌っとると違うかなあ」

ミノリは宵風に視線を落とし、小首を傾げた。

「宵風、知ってるの？」

「知らんよお。ただ、何となくそう思ったけえ、言ってみただけやわあ。それよりミノリはん、もう眠らんのやったら、寝袋片付けえ。早く出発するにこしたことはないからなあ」

宵風の言葉に頷いて、ミノリは寝袋を片付け始めた。宵風は火をいじりながら周囲に注意を配り、何か別の存在が近くにいないか探り始めた。

男の存在は、もうとつくに遠くまで行ってしまったらしく、感じ取ることはできなかった。

To be continued

4：アイ・ウォント・ユー

ミノリは星空のもと、行きかう人々の前で、心を込めて懸命に歌を歌っていた。豊かな黒髪が風になびき、白い滑らかな肌が服から覗いていた。

宵風は歌を歌い続ける少女の足元に、少女と荷物を守るような姿勢で腰を落ち着けていた。金色の美しい体毛が、街灯から漏れる光に照らされて煌々と輝いていた。

少女は歌い終え、優雅にお辞儀をした。その途端、辺りから拍手が沸き起こる。少女は照れたように笑って、頬を掻いた。仕草のひとつひとつが愛らしい少女だった。

歌を聴いてたギャラリーが、少女の元に歩み寄って一人一人、足元の帽子にコインを入れていく。

コインがひとつ増える度に、ミノリは軽くお辞儀をして礼を言った。なかには結構な額を入れてくれる客もいて、ミノリはすっかり恐縮してしまった。

歌を歌うことで人からお金を貰うということに、ミノリは未だに慣れていなかった。

コロン、と最後にコインを入れてくれたのは、小さな女の子だった。

ミノリは幼い少女にも軽くお辞儀をして、微笑みながら礼を言う。が、幼い少女はミノリを見てはいなかった。彼女の視線を辿ってみると、その視線の先には宵風がいた。

ミノリは少女と宵風を交互に見やった。幼い少女は宵風を真剣な表情でじっと見つめたまま、その場を動かこうとしない。ミノリは困惑して宵風に視線を向けた。宵風も微かに眉を顰め、首を傾げている。そんな彼を、少女は無言で見つめ続ける。暫く膠着状態が続いた。

「あの……どうしたのかな？」

膠着状態に痺れを切らしたミノリが、躊躇いがちに少女に問う。少女は視線を宵風から逸らさず、口を開いた。

「リリカ」

「え？」

「リリカ」

ミノリは少し思案し、それが少女の名前なのだと悟る。しかし一体何故この少女は名前を明かしてくれたのだろうか。ミノリは訳が分からず、未だに宵風を熱心に見つめ続ける少女、リリカを困ったように見た。

と、不意にリリカが動いた。宵風の頭に小さな手をやり、そっと撫でる。

宵風はまだ困惑しているようではあったが、頭を撫でられると小さく鳴いた。すると今まで真剣な表情を浮かべていたリリカの顔に、ほころんだ笑みが浮かぶ。可愛い少女だった。

リリカは数度宵風の頭を撫でると、満足したように手を引っ込め、ミノリと宵風にくるりと背を向けて駆けていった。二人はそんな小さな少女の後姿を言葉もなく見つめていた。

次の日も、同じ場所に歌いに行くと、リリカがやってきた。

相変わらず彼女の視線は宵風に釘付けで、ミノリの歌を聴きに来たというよりも宵風に会いに来ているようだった。ミノリが歌を歌い終わると、一番最後に帽子にコインを入れ、宵風の頭を撫でに来る。満足すると、何も言わずに去っていく。

そんな日が三日程続いた。

「あの子、宵風のことがお気に入りみたいだね」

泊まっている宿の部屋で寛ぎながら、ミノリはどこか面白がるように言った。

宵風は毛づくろいを中断してミノリを困ったように見やる。当の本人はあまり嬉しくないようだ。

ミノリはそんな彼に柔らかく微笑みかけながら、ベッドに腰掛けて髪を櫛でとかしていた。

「ミノリはん、明日でこの町で歌うのは最後にせえへん？」

宵風の提案に、ミノリが不思議そうな表情を向ける。

最初の予定では、一週間今いる町に留まって歌を歌うことになっていたのだ。

もともと、その予定を経たのは宵風である。それを、まだ三日しか経っていないのに切り上げようと言うなんて。

あのリリカという女の子に好かれているのがそれ程嫌なのだろうか。ミノリは髪に櫛を当てながら、宵風の言葉の続きを待った。しかし彼はそれ以上何も言わなかった。ただ黙ってミノリの顔を見つめている。ミノリが宵風の提案にど

う答えるのかを待っているのだと知れた。

「私は別に構わないよ」ミノリは宵風の提案に同意を示す。

別にこれといってこの町に愛着がある訳ではないので、宵風の提案を受け入れるのはさほど苦ではなかった。彼女にとっては、歌さえ歌えるのならどこでも同じことなのだ。

ミノリの返答に、宵風はあからさまにほっとした様子を見せた。

足音も立てずにミノリに近寄り、ベッドに飛び乗ってミノリの傍に寄り添う。

ミノリは櫛を鞆にしまい、傍らの宵風のふわふわした柔らかな体毛にそっと手を当てた。

金色の体毛を指に絡めてみる。触れ合う場所から宵風の温かな体温が伝わってきて、心地よかった。

「そんなにあの、リリカちゃんが嫌？」

耳の付け根あたりをそっと搔いてやりながら問いかける。宵風は気持ち良さそうに目を細めながら苦笑した。

「あの娘の視線がなあ。何となく耐えられんというか何というか……」

我を物欲しそうに見るあの視線が嫌なんやわあ、と彼は答えた。

その言葉に、ミノリはリリカという少女の様子を思い浮かべる。

確かに、彼女の、宵風を見る視線はどこか熱っぽかった。あれは、そう、まるで恋する乙女のような目つきだったとミノリは思う。

ただの狐に向けるにしては、不思議なほど情熱的な視線。

まさか。

はっとした。

まさか、宵風がただの狐じゃないと気づいているのだろうか。人型になることもできると知っているのだろうか。

そう考えるとミノリはぞっとした。宵風を危険な目にはあわせたくなかった。

やはり、宵風の言う通り、ここはこの町を早めに出発した方がいいのかもしれない。宵風のことを誰かに知られる前に。この町で歌うのは、明日で最後にしよう。それから、明日も別の場所で歌うことにしよう。ミノリはそう決意し、宵風の背中をそっと一撫でした。

朝が来るとミノリは宵風と部屋で遅めの朝食を取り、出発の準備に取りかかった。出発の準備といってもただ鞆の中身を整理するだけで、大して時間はかからなかった。

支度を終えると、ミノリと宵風は宿屋を出て、昨日まで歌っていた場所とは別の広場に向かった。

なるべくリリカに出会おうのを避けるためであった。もっとも、歌を歌うことでリリカに見つかる確立はかなり高いのだが。それでも何となく昨日まで歌っていた場所で歌う気にはなれなかった。

ミノリは広場の中央に堂々と立っている、ドラゴンのモニュメントの前に立ち、荷物をしたに下ろして帽子を地面に置き、歌う準備をした。腹の前で両手を組み、深く息を吸う。

何を歌うかは決めてなかったが、不思議と、歌が勝手に口から飛び出してくる。いつもそうだった。

頭では何を歌うかなど考えない。考える前に口が勝手に動いてメロディーを紡ぎ出している。

まるで、自分の身体に誰かが乗り移って歌を歌っているかのような感覚。

ミノリはいつも、自分は一人で歌っているのではないと感じていた。いつも傍に誰かがいて、歌うときになるとミノリの身体にそっと入ってきて一緒に歌を歌ってくれる。そんな風を感じていた。今回も、いつもと同じようにその感覚があった。だからミノリはリリカのことも忘れて安心して歌に専念することができた。

逢いたい 貴方に
恋焦がれてどうしようもないの
逢いたい 貴方に
貴方の瞳を見た瞬間 感じた運命
私と貴方 深いところで繋がってる
この絆をどうか確かめさせて

歌っている間のミノリは、歌にのめりこんでしまっているのが気づかなかったが、今回のこの歌の選択は宵風に悪寒を感じさせるのに十分だった。

今までミノリはその時その時でもっともふさわしい歌を歌ってきた。

それはまるで、聴く者の想いを感じ取り、彼らの代わりに心中を吐露しているかのようだったり、あるいは聴く者が求める答えを歌として彼らに与えてやっているかのようだった。

しかし今回のこの歌。

思い過ごしかもしれないが、まるであの例の少女の心を歌っているかのようなこの歌詞。

宵風は嫌な予感を胸いっぱい広げつつ、無意識のうちに観衆のなかにリリカの姿を探していた。

さっと視線を走らせ、耳をぴくぴくと動かして気配を探る。彼女の姿を見つけるのにそう時間はかからなかった。

宵風は全身の毛が総毛立つのを感じた。

彼女は他の観衆とは違い、ミノリではなく宵風に熱い視線をひたと向けていた。

宵風は慌てて視線を逸らせた。しかしそれでも彼女から送られてくる視線は熱く、体毛が焦げるかのような錯覚に囚われる。

宵風は早くリリカが立ち去ってくれるよう念じたが、それは叶わなかった。

いつものように歌い終えたミノリに拍手が向けられる。

拍手の後には、観衆が一人一人ミノリの帽子にコインを投入していく。

ミノリは笑顔でコインを受け取りながら、今更ながらに自分が選曲した歌詞を思い出してはっとしていた。慌てて宵風に視線を向けると、宵風は心なしか疲れた顔でコインが帽子に集まっていくのを眺めていた。ミノリは顔を上げて少女の姿を探した。

探すまでもなかった。

少女はこれまで通りコインを片手に観衆の後ろの方に立っていた。その両眼は、熱っぽく宵風を見つめていた。

リリカは最後にコインを帽子に入れた。そしてその後、宵風に触ろうと手を伸ばした。

だがそれはできなかった。宵風がついと立ち上がって、リリカの手から逃れたのだ。

今までは我慢して撫でられていたが、今回はもう我慢の限界が来たようだった。

ミノリはさり気なく宵風とリリカの間に割って入って、リリカに苦笑を零した。

リリカは驚きに見開かれた目で宵風を見つめていたが、ミノリが間に入るとミノリに視線を向けた。

もしかすると、ミノリをちゃんと見るのはこれが初めてかもしれない。

「ごめんね。この子、人間が苦手みたいで」

そう言うと、リリカは再び視線を宵風に向けた。宵風はというと、ミノリを申し訳なさそうに見上げていた。そうすることで、リリカと視線を合わせるのを避けているように思われた。

「でも、昨日までは触らせてくれたのに」

リリカが驚いたような顔のまま口を開いた。自分の名前を言う以外にこの少女の声を聞くのは、二人にとってこれが初めてだった。少女は小鳥のように甲高い声をしていた。声には純粋な驚きだけが含まれていた。

「今日はそういう気分じゃないみたいなの。ごめんなさい」

宵風の代わりに謝ると、ミノリは鞆を肩に掛け、帽子を拾い上げてその場を立ち去ろうとした。

しかしリリカがミノリの前に立ちはだかった。今度はミノリが驚いて少女を見つめる番だった。

少女はきつとした目つきでミノリを半ば睨むように見上げていた。

「お願い。その狐を、リリカにちょうだい」

ミノリはますます驚いて少女を見下ろした。

宵風がミノリの背後で微かに唸った。心底嫌がっている様子だった。

ミノリは宵風に案ずるような視線を投げた後、困ったような表情を作ってリリカと視線を合わせるよう中腰になった。

。

「あのね、この狐さんは、物じゃないの。あたしの大切な家族なの。そんな簡単にあげられるようなものじゃないの」

分かってくれるかな。ミノリは真剣な目でリリカを見つめた。だが、リリカは眉間に皺を寄せてきつとミノリを睨んだ。

「リリカにくれなきゃ、お姉さん、大変なことになるよ」

ミノリは目を瞬いた。

こんなに幼い少女いきなり脅されるとは思いもしなかった。

宵風は威嚇の唸り声を上げたが、リリカは怯む様子もなく、むしろますます宵風に熱っぽい視線を向けた。彼女に視線を向けられると、宵風は縮こまって耐えるしかなかった。

「リリカは町長の娘だもん。リリカは欲しい物は何でも手に入れるんだもん。町長に逆らったら、お姉さん、ひどい目に合うよ」

どうやら、このリリカという少女はこの町の町長であるという父親に相当甘やかされて育ってきたようだ。

ミノリは脅しに怯えるどころかむしろ呆れかえって少女を見下ろした。

ミノリと宵風は各地を当てもなくさすらう身にある。一つの町で騒ぎを起したって、また別の地へ赴けばいいと思っているから、こんな脅しなど怖くもなんともない。

ミノリは大きなため息をついて、立ち上がって少女を見下ろした。

「そんな脅し、きかないよ。ともかく、この子はあげられないの。分かって」

リリカは頬を膨らませてミノリを睨みつけたが、ミノリは引かなかった。

これ以上言っても聞かせても無駄だと判断したミノリは、リリカの横を通り過ぎてその場を立ち去ることにした。

足早にその場を離れる。一度も振り返らなかったが、リリカが後を追いかけてくる気配は感じられなかった。ただ、背中にひしひしと突き刺さるような視線を感じていた。

それは宿屋で出発の準備をしている時のことだった。いきなりどんと荒くドアを叩く音がした。

ミノリがはいと怪訝そうに声をかけてもなお叩き続け、制止する宵風をなだめてドアを開けると、そこには三人の男がいた。

一人は恰幅のよい男で高級そうなスーツに身を包み、見るからに身分の高い者だと窺いしれた。

あとの二人は細身で真っ黒なスーツを着こなし、恰幅のよい男の斜め後ろに控えていた。見たところ、この男のボディガードといったところか。ミノリはこの三人を見て思わずぼかんと口を開いた。

「中に入っても？」

恰幅のよい男が、自身のひげを片手でいじりながらミノリに問うた。ミノリは怪訝そうな表情に戻って宵風に一瞬視線を落とした。宵風は鋭い目つきで三人を睨んでいた。

「どういったご用件でしょうか？」

男の言葉を見無視して、ミノリは敷居をまたがせまいと仁王立ちになって問いかけた。

男はミノリの態度に少し不満げな様子を見せたが、ひげをいじりつつ尊大な態度で答えた。

「その狐のことで、ちょっとお話が」

この言葉で、ミノリと宵風は男が誰なのかを悟った。

リリカの父親でありこの町の町長である男。つまり、この町一番の権力者となる男である。

なるほど、この男があつたリリカの父親なのかとミノリはどこか感心しながら男を真正面から観察した。男がわざとらしく咳払いをするまで、ミノリは男の観察を続けていた。

「中に入っても？」

町長である男が再度ミノリに尋ねた。ミノリは困惑したような表情を作り、自身の口元に手をやって申し訳なさそうな声で言った。

「すみません。私たち、もうこの宿を出るところですから。この部屋にいることはできないんです」

「大丈夫。宿屋の主人には話をつけてあります。どうか部屋で少し、お話をさせてください」

余計なことをしてくれたものだとしてミノリは温厚そうな宿屋の主人を思い浮かべた。

渋々ながら部屋に町長とそのボディガードらしき男たちを入れ、宵風に目だけで合図をする。

宵風は申し訳なさそうな瞳でミノリを見やってから、そっと、男たちに気づかれぬように部屋を出ていった。それを見届けてからミノリは静かにドアを閉めた。

「おや、狐は？」

男が不思議そうにミノリに問いかける。ミノリは困ったように肩をすくめ、首を横に振った。

「彼、散歩が好きなんです。ちょっと出かけたみたいですね」

「探しだせ」

町長は後ろに付き従っていた男二人に命じた。男二人は軽く頭を下げてから、部屋を出ていこうとする。ミノリは慌ててドアの前に両手を広げて立った。

「ちょっと！ 彼は私の家族ですよ！ 乱暴な真似はよしてください！」

「そこを退いてください。大丈夫、丁重に扱いますから」

男の一人が淡々とした口調でミノリを宥めるように言った。が、それは男の予想に反して逆効果だった。丁重に扱う。扱う？ 何だその言い草は。まるで物のようではないか。宵風は物ではない。ミノリは男の言葉にますますかたくなった。

「彼は物じゃありません！ 彼に近づかないでください！」

「すぐに私の娘の物になりますよ」

ミノリはきつと町長を睨みつけた。

町長はといえば、備え付けの小さなソファに腰を下ろして、まるで自分の家であるかのようにゆったりと寛いでいる。その態度がますますミノリを逆上させた。

が、ミノリは理性の力で何とか平静を保とうとした。理性が本能に勝った。ミノリは深呼吸をして自分のなかの怒りを鎮め、ドアの前に立ったまま、町長に向き直った。

「彼は物じゃありません。差し上げる訳には参りません」

ミノリの真剣な言葉に、町長はやれやれといったように肩をすくめた。

持ってきていた黒い鞆からなにやら袋を取り出し、それを床に放り投げる。ジャランと鈍い音が床に叩きつけられた。

。

袋は、ミノリと町長の丁度中間地点に着地した。ミノリはその袋と町長に、順に冷ややかな視線を向けた。

「それを差し上げましょう。代わりに、あの狐を渡してください」

袋には明らかにミノリが今まで目にしたこともないような大金が入っていた。ミノリは袋には視線を向けず、町長をまっすぐ睨みすえた。こんな金など、何の意味も持たないことを分からせてやるにはどうするのが一番いいのか、彼女は頭を懸命にめぐらせた。

「お金じゃ買えません」

ミノリは淡々とした調子で言った。

「彼の存在は、私にとってこの世でもっとも大切なものです。お金なんかで交換できるものじゃありません」

「では、貴女は何が欲しいのかな？」

町長が鷹揚に尋ねた。

「娘から聞いた話じゃ、貴女は歌い手だそうじゃないか。無名のまま路上で歌い続けるより、有名になりたいくはないかな？ 誰もが知る人気歌手になりたいくはないか？ 私ならいくらでもコネがあるから、貴女を有名にしてあげられるよ」

この言葉を聞いて、ミノリはまたもやかっとなりそうになった。

胸のなかが熱く煮えたぎり、手は怒りに震えた。自分を侮辱されたと彼女は感じていた。

自分には全く才能はないのだと。

権力に頼らねば、名をはせることはできぬのだと男の言葉は暗にそう言っているようにミノリには聞こえた。

ミノリは歯をくいしばって屈辱に耐えた。怒りを無理矢理に押さえ込んだ。

「結構です。私は、自分の力で、歩いていきたいんです」

そうはっきりと誘いを断ってから、不意にミノリは不安になった。

自分を簡単に有名にできるということは、裏を返せば自分を簡単に潰せるということなのではないか？

無名の自分など、確かに一ひねりで潰せるような気がする。この男なら。

ある町の町長にそこまで権力があるのかはミノリには分からないが、この男なら可能であるようにミノリには感じられた。

怒りが鎮まり、代わりに恐怖が沸き起こってきた。

宵風を渡すわけにはいかない。

だが、断ったところでこの男は素直に引き下がってくれるだろうか？ 何かしらの手段を使って、無理矢理にでも自分から宵風を奪おうとしてくるのではないか？

それだけは避けたい。何としても、宵風を守りたい。こんな町など来るのではなかった。もしくは、もっと早くにこの町を出るんだった。

しかし今、ミノリのなかには恐怖が渦巻いていた。宵風に傍にいてほしかった。同時に、宵風には安全な場所にいてほしかった。

相反するふたつの感情がミノリのか弱い心のなかでせめぎあい、ミノリは段々と吐き気を覚えてきた。どうしたらいいのか分からなかった。

町長を見やると、彼は余裕の態度でミノリを面白そうに見やっている。視線はミノリの方が高いはずなのに、何故か「見下ろされている」気がしてならなかった。ミノリは口をおさえた。本当に吐きそうだった。こんな弱い自分が嫌だった。宵風がいなければ、自分はこんなにも弱くてちっぽけなのだと思い知らされた。

その時、ドアが開く音がした。ドアに背を向けていたミノリを除いて、部屋にいる誰もが、ぱっとドアに目を向けた。

「全く……呆れますなあ。男三人でよってたかって、か弱い女の子を追い詰めるなんて。一体今までどういう教育受けてきたんか気になりますなあ」

「……誰だ？」

町長は怪訝そうな表情で、今しがた現れたばかりの謎の青年に問いかけた。町長の問いかけは完全に無視して、宵風は心配そうにミノリの肩を抱く。ミノリは口元を手で押さえながら、宵風の服をぎゅっと握り締めた。

「ミノリはん、大丈夫か？ ゆっくり深呼吸してみい。落ち着くから」

ミノリは弱弱しく頷いて、口元を押さえのまま深呼吸をした。

一度、二度、三度。深く息を吸うたびに、恐怖が薄れていくような気がした。

いや、宵風が傍にいてくれるからだ。彼が傍に来てくれた途端、ミノリのなかから恐怖はなくなり始めていた。

「女の子をよってたかって苛めるのは、感心しませんなあ」

町長は不愉快そうに眉を顰めた。

「何なんだ、いきなり。部外者が口を出していいもんじゃない」

「部外者ではありまへん。彼女の連れどす」

この言葉に町長は目を見開いた。

「何だ。なら話は早い。あの狐を渡してください。代わりにその金貨でも何でも差し上げましょう」

宵風はミノリの肩を抱いたままずっと目を細めた。

見られた相手が思わず凍り付いてしまうような、冷ややかな視線だった。町長はびくりと身体を震わせ、手元の鞆を握りしめた。そう反応してしまってから、今のはなかったことにしようともいうように軽く咳払いした。そんな町長の行動を全て、宵風は冷たい目で見つめていた。

「命をそない乱雑に扱ってはなりまへん。この娘が嫌がっつるでしょう。人が嫌がることを強制してはなりまへん」

「だから代わりに何でも望むものを差し上げようと言っているんじゃないか」

町長は苛立ったように言った。

「お前たち、何してる。さっさと狐を探しに行け」

町長の言葉にはっとして、それまでドア付近で立ち尽くしていたポディーガードの二人が部屋から素早く出ていった

。探したところで無駄なのにとミノリは横目で彼らを見送ってから思う。宵風は今ここにいるのだから。ここ以外のどこにもいないのだから。探したところで見つかりっこない。宵風が戻ってきてくれてから、ミノリは事態をどっしりと構えて受け止められるようになっていた。

「取り乱してしまって申し訳ありません」

ミノリが口元から手を離して、少し頭を下げて町長に謝った。

「お詫びに一曲、歌を聴いてもらえませんか？」

町長は怪訝そうな表情を浮かべたものの、どうぞ、と何気なく言った。ミノリは感謝の言葉を述べてから、宵風から少し離れ、腹の前で両手を組んですうと大きく息を吸う。そして、歌い始めた。静かに、しかしはっきりとした声音で

。

夢がある 大切な夢
私の夢はね 聞いて笑わないで
貴方の傍にずっといること
ほら 貴方やっぱり笑う
でもね この夢 意外と叶えるのが難しい

純粹に 貴方が大切なの 貴方が好きなの
離れたくない 一秒たりとも
蒼い宇宙が終わっても
ずっと貴方の傍にいたい
そんな私のささやかな願いを
神様は 聞き届けてくれるかしら

短い歌を歌い終え、ミノリは目を閉じた。

そしてずっと開いたときには、彼女の顔には恐怖の色など微塵も残っていなかった。あるのは、満ち溢れんばかりの自信。

ミノリの歌には不思議な力があつた。

聴いている者の頑なな心を解きほぐしていく不思議な力が。

ミノリ自身は、その力を自覚していなかったが、宵風は身を持って経験したことがあるので、十分にその力の存在を知っていた。

今回も、ミノリの歌の力は発揮された。

歌詞の内容よりも、彼女の歌声に町長は心打たれたようだった。痺れたようにソファに張り付き、目を大きく見開いてミノリを凝視している。ミノリは彼になっこりと微笑みかけた。その微笑みで、町長は漸く我に返ったようだった。「いやいや、これは素晴らしい」

男は額に浮かんだ汗をハンカチで拭いながらミノリの歌を褒め称えた。

ミノリはいつものようにはにかんだ笑みを浮かべ、頬を掻く。そんなミノリを宵風が愛おしそうに見つめている。

「歌を聴いていたら、貴女の、狐に対する想いがひしひしと伝わってきました。余程あの狐が大切なんですね。わがままを言って申し訳ありませんでした。この話はどうか良かったことにしてください」

町長はソファから立ち上がって床に置かれたままになっていた袋を拾い上げ、ミノリと宵風に頭を下げた。ミノリは微笑んで彼を見やった。

分かってもらえたことが嬉しかった。

しかしどうしてこんなに早く分かってもらえたのだろうかとミノリは疑問に思う。

不思議そうな視線を宵風に送ると、彼はただ微笑んで彼女を見つめ返すだけだった。

宵風は、自分の歌の力を知らない彼女を微笑ましく思っていた。

知らないだけに、力は増すのかもしれないとさえ思っていた。だから彼はミノリには何も言うつもりはなかった。

町長が去った後で、ミノリと宵風も宿を出た。

外は美しい星空の下、街灯がぼんやりと輝き幻想的な雰囲気を作っていた。

悪くない町だったとミノリは町を去る今になって思う。

リリカのことを言わなければ、もう少し長居してもよかったのだが。今更そう思っても仕方がないことだとミノリはこっそり苦笑して歩みを進めた。

「ミノリはん」

辺りに人気がなくなったところで、宵風が口を開いた。ミノリが何、と目だけで問いかける。

「おおきになあ」

「？ 何が？」

何のことを言っているのか分からず、ミノリが首を傾げると、宵風はふっと笑った。

「何でもないわあ。さあ、次の町に向けてはんなり歩いていこか」

ミノリは不思議そうな表情を浮かべたまま、とりあえずこくと頷いた。

本当は。

ミノリを下から見上げながら、四本足で地を踏みしめて歩く。

いつの間にかすっかり見慣れたこのあどけなさの残る顔。

ミノリと出会う前まではこんな気持ちになることもなかった。

愛おしさが胸に溢れだし、宵風は目を細めて彼女を見つめた。少女は真っ直ぐ前を見つめて歩いている。

本当はな、ミノリはん。

心のなかで宵風はミノリに語りかける。

私のことを、そない大事に思ってくれて、嬉しかったんよ。

宵風の視線に気づいたミノリが、そっと笑いかけた。宵風もまた、彼女に微笑みを返す。何よりも愛おしい彼女に。

***To be continued ***

5：狐と少女

そこは、決して朝の来ない世界。永遠に閉じられた夜の世界。空には小さな星々が地上の人々を導くために懸命に輝き、地上には魔法の光がぼつぼつと星の光を消してしまわない程度に咲いている世界。本当かどうか分からないが、神が、戦争に勝ったたったひとつの国だけを、朝の来る世界へ誘うと約束したとされる、戦の絶えない世界。暗闇に覆われた静かな世界。

そんな世界に、狐は生きていた。

金色の美しい体毛を持つその狐は、とある森の奥にひっそりと暮らしていた。

彼には家族がいた。母と弟と妹が彼の帰りを今か今かと待っているのだった。

しかし彼はまだ家族の元に帰る訳にはいかなかった。

家族のために強くなると誓って、彼は引きとめようとする家族を振り切って、一人遠いこの地へとやって来たのだった。

今でも目を閉じれば父の姿がまざまざと思い浮かぶ。

家族を守るために自らを犠牲にした父の勇敢な姿。

家族のために自ら人間に捕らえられた父。今では、生きていいのか既にこの世にいないのかすら分からない。

そんな父のことを思うと、強くなりたいという思いが彼の胸を熱くした。

強くなりたい。自分のために。家族のために。

彼は人間のせいで父親を失ったが、人間に復讐したいとまでは思っていなかった。

確かに人間は彼ら一族を不幸のどん底に陥れた。

しかしそれはあくまで一部の人間がやったことであって、人間全体が、極悪非道な生き物ではないと彼はちゃんと理解していた。

だから復讐しようなどという愚かな考えは彼の頭には思いつきもしなかったし、人間を憎む気持ちもそれ程強くはなかった。

しかし人間が好きかと問われれば、彼は否と答えるしかない。極力、人間とは関わりあいになりたくなかった。

だから彼が自らの修行の地として選んだこの場所も、当然のことながら人間が好んで入りこまないくらい鬱蒼と茂った森だった。森には盗賊が住んでいるとは風の噂で聞いてはいたが、今のところそういった輩に出くわしたことはなかった。

その日も彼は一匹で修行に励んでいた。

狐火やら幻術やらといった自らの持つ技を懸命になって磨き、ほとんど休むことなく修行に打ち込んでいた。彼の狐火は、父がいた頃よりも火力が強くなり、幻術はより一層鮮やかで現実と区別することが出来ないほどにまで成長していた。

彼は幻術を磨くことに専念していた。

神経を研ぎ澄ませ、より鮮やかで、より現実と見間違ふほどのリアリティを求めて、彼は虚空に対峙していた。ガサリと物音がしたのはそんな時だった。

彼は茂みが揺れる音にはっとして気配を尖らせ、辺りにさっと視線を走らせた。
揺れている茂みはすぐに見つかった。それは彼の後方にある茂みのひとつだった。
彼は身構えた。

一瞬逃げることも考えたが、相手が相手なら幻術を試してみるのもいいかもしれないと考えたのだ。

だから彼はその場を去らずに、茂みから飛び出してくるであろう者を待った。

熊か？ 狼か？ それとも盗賊か？

彼はぴりぴりと張り詰めた空気を生み出して構えた。茂みを揺らしていた者は数秒の後に姿を現した。

その姿を見て、彼は目を見開いた。

相手もまた同じように目を見開いて彼を見ていた。互いに全く動かずに見つめあい、膠着状態となった。

茂みの奥から姿を現したのは、一人の人間の少女であった。

漆黒の長い髪が揺れ、明るい星空のような深い群青色の瞳が大きく見開かれて彼の姿を映していた。

雪のように真っ白な肌は星の光に溶けてしまいそうで、華奢な肩には見るからに重そうな鞆が斜めにかけていた。身体つきは全体的に細いが、顔はどこか丸みを帯びていた。

愛らしい少女だった。翼が生えていたなら天使と見間違えたかもしれない。

しかし彼の気を引いたのは、彼女の外見でも重そうな鞆でもなかった。

それは、彼女の持つ雰囲気だった。

今まで人間と遭遇するのを極力避けてきたため当然なのかもしれないが、その少女は狐が今まで会ったことのあるどの人間とも全く異なった雰囲気を持っていた。

それはまるで砂糖菓子のように甘く、たんぽぽの綿毛のように柔らかく、星の光のように儂いながらもどこか強く、そして神話に聞くタイヨウのように包みこむような温かさを含んでいた。

狐は自分でもよく分からないまま衝撃を受けてその場に立ちすくんだ。

何か電撃のようなものがうなじを走り、身体全体を駆け抜けた。彼は少女を穴が空くほど見つめた。

少女もまた、何か感じるどころがあったのだろうか、狐を驚きに満ちた瞳で見つめ返していた。

どのくらい見詰め合っていたのだろうか。彼には、一瞬のことにも数時間のことにも思えた。

気づけば少女は狐に一步一步確実に近づいてきており、狐はその場に根が生えてしまったかのように動けなくなっていた。いや、動く気にならなかった。彼は大人しく少女が自分に近づいてくるのを待っていた。

待っている間も少女を観察していた。すると、少女の腕に走る一筋の赤い線が目に入った。

木の枝にひっかきでもしたのだろうか、それまで気づかなかったことが不思議なくらい、大きな傷痕だった。傷自体はそれ程深くはなさそうだったが、早く消毒しておくにこしたことはない。狐はまるで怪我をしたのは自分だとでもいうかのように眉間に皺を寄せて、

「あんさん、大丈夫ですか？」と少女に尋ねていた。尋ねてから、はっと気づく。この姿のときは、人間には言葉は通じないのだった。人型になれば意思疎通を図ることができる。

人型になるか。いや、しかしいきなり人型になって相手を驚かせるのもいかなものか。

目の前の少女がそんな人間だとはあまり信じたくはないが、自分の正体を明かした途端に自分を捕獲しようとする可能性だってある。

何も、見ず知らずの少女のために自分の身を危険に晒すことはない。そんなことをぐるぐると考えていると、少女は不意ににっこり笑って、

「ありがとう。この怪我のことを心配してくれてるんだね。でも、これくらいなら大丈夫」と答えた。狐は再び衝撃を受けて少女を見つめた。少女はそんな彼の様子を見て、小首を傾げた。

「あんさん、私の言葉が分かるんですか？」

彼は震える声で尋ねた。信じられないことだった。だが、一瞬考えこむような素振りを見せた後、少女は平然と頷いた。

狐は呆然として少女を見上げた。今や彼女は狐の目の前に立っていた。

原型時の自分たちの言葉を理解する人間などに、狐はこれまで会ったことがなかった。

世の中にはこんな特殊能力を持った人間がいたのか。実は大勢いるのだろうか。それとも、この少女が特別なだけなのだろうか。

狐は少女を見上げて、今更ながらに少女が自分の目と鼻の先にいることに気づくと、一歩後ずさった。

「あ、怖がらないで」

何もしないからと少女が優しい声音で言った。鈴が転がるような、美しい響きを持った声だった。狐が思わずその声に聞きほれてしまう程だった。

「道を教えてほしいだけなの」

迷っちゃって、と困ったように笑う少女。

頭に片手をやり、もう片方の手で鞆のなかを探っている。中から取り出したのは地図のようだった。

随分と古ぼけた地図だ。端の方が黄ばんでいる。あまり古いと地図としての役割を果たさないのではないかと狐は思った。少女はそんな地図を破れないよう丁寧に広げ、狐に見えるように屈みこんだ。

「この町に行きたいんだけど」地図上の一点を指差す。「どっちの方角に向かったらいいのかな」

狐は地図などこれまで見たことがなかったので地図を指し示されたところで判断できるはずもなかったが、幸いにもどの方角に行けば、この森から一番近い町へ行けるかは知っていた。

だから狐はその方角に顔を向けてあっちだと少女に教えてやった。少女はにっこりと笑って狐に感謝の意を述べた。

「ありがとう。助かったよ」

少女は立ち上がって丁寧に地図を折りたたみ、鞆のなかにそっとしまいこんだ。まるでその地図は宝物だというように扱いは丁寧だった。鞆を外からぽんぽんと二度軽く叩くと、さて、と言って狐に顔を向けた。

「それじゃあ狐さん、さようなら」

「……ちよい待ちい」

狐に背を向けて歩き去ろうとする少女の後ろ姿に彼は声をかけた。少女が不思議そうに振り返った。

と、驚いたような顔をした。

無理もなかった。狐の姿が一瞬にして、人間の男の姿に変わっていたのだから。

少女は微かに口を開けて、彼をまじまじと見つめた。彼は少し苦笑して、少女の怪我をしている方の腕をとった。加減はしたはずなのに少女が少し顔をしかめた。傷が痛んだのだろう。

「ああ、すいまへん」狐は慌てて謝った。

「でもな、この怪我、早う治療してやらんと。あとあと傷が残ってしまいますよ？」

「でも、」

「でもやありまへん」

彼は半ば強引に彼女の腕を引っ張って、湧き水のある辺りに連れていった。その場所は、彼が修行していた場所からそう遠くはなかった。狐火を使った際に火事などにならないよう、万一のときに備えて彼はいつも水辺の近くで修行に励んでいたのだ。

彼は湧き水で少女の傷をそっと丁寧に洗ってやると、近くに生えていた薬草を包帯代わりに巻いて、木を覆っていた蔓でしっかり固定してやった。てきぱきとしていて、手際が良かった。少女はその一部始終を、特に抵抗

することもなくしげしげと感心したように見つめていた。

「ありがとう」

手当てが終わると、少女は笑顔で彼に礼を述べた。

彼はいや、と言ったきり黙って、少女から目をそらせた。

照れたのではない。

何故少女に手当てなどしてやったのか自分でも分からず、困惑していたのだ。

見ず知らずの少女に道を教えてやっただけでも十分親切にしたといえるのに、その上手当てまで。

何故自分はこの少女に親切にしてやりたくなっただろう。ほとんど無意識の行動だった。

もう少女が去るのを引き止めまい。

これ以上この少女の傍にいたら、何だか自分でもよく分からないが、自分の信念が、目的が変わってしまうような気がする。

それがいいことなのか良くないことなのかは分からない。でも、今は変わりたくない。

そんな気がする。今は、今のままでいさせてくれ。

彼は混乱する頭のなかでそう深く念じながら、立ち去る少女を見送った。少女の後ろ姿を見ると、何故だかまた引き止めたくなかったが、彼は理性の力でその想いを打ち消した。

少女が去ると、彼はまた一人きりになった。狐の姿に戻り、再び修行を再開しようとする。

幻術はもう今日のところは十分だと思ったので、狐火を特訓することにした。虚空の一点に集中して、炎を生み出そうとする。小さな炎がいくつか、出現した。が、すぐに消えてしまった。

彼はもう一度集中して、炎を現出させようとした。が、今度は一瞬火花が散っただけで、炎が現れることすらなかった。

狐は困惑してぼんやりと宙を見つめた。集中力がすっかり途切れてしまっていた。

脳裏には先ほどまですぐ傍にいた少女の姿。長い漆黒の髪。群青色の大きな瞳。透き通るように美しい滑らかな肌。

狐はぶるんと頭を振って彼女の残像を消そうとした。

再度訓練に集中しようとする。が、できなかった。

心のどこかでもう一人の自分が彼に問いかけていた。

後悔していないか、と。

あの少女は、お前の運命に変革をもたらす者だったかもしれないのに、引き止めずにあのまま行かせて、本当に後悔していないのか、と。

少女を一目見た瞬間に感じたショックが蘇る。もしかしたら、あの少女こそ、自分が求めていた存在なのかもしれないと今更ながらに思う。

そこではとつする。

自分は別に、運命に変革をもたらす者など待ち望んでいなかった。

自分の目的は、家族を守れる程強くなることだ。

十分に強くなったら、家に戻って家族を守って生きることこそ、自分のやるべきことなのだ。

他に選択肢などない。

自分は何を迷っているのだ。

あの少女は、自分の一生とは何の関わりもない。ただ一瞬、同じ時間を過ごしたというだけのこと。それ以上の存在ではない。

少女を行かせたことに対しては何の後悔もしていないはずだ。

後悔する理由なんてどこにもない。はずなのに。

どうしてこんなに胸騒ぎがするのだろう。

どうしてこんなに、さっきの少女のことが気になるのだろう。

どうしてこんなに、少女の残像が網膜に焼き付いて離れないのだろう。狐にとっては未知の体験で、彼はすっかり混乱していた。

その時、微かに声が聞こえたような気がした。先ほどの鈴のように美しい声が。声は、強気ではあったが、どこか切羽詰った調子を持ち合わせていた。気のせいかもしれない。ただの空耳かもしれない。

しかし気づけば狐は、声がしたと思われる方向に向かって走り出していた。走り出してから、自分が走っているということに気づいた。

一瞬、立ち止まって修行に戻ることも考えた。

しかし立ち止まろうとすると、身体が全力で抵抗して、走り続けようとするのだった。まるで心と身体が分断されてしまったかのようなだった。

彼は困惑したまま走り続けた。心は、ひどく揺れていた。

どうするのが最善なのか、彼には見当もつかなかった。

そうこうしているうちに、声ははっきりと聞き取れるようになってきた。やはり先ほどの声は空耳などではなかったのだと安心する。が、安心するのはまだ早かったのだと気づく。

彼は木の陰から何の考えもなしに少女の前に飛び込んだ。

少女と男たちは、突然の来訪者に驚いたようだった。

六人の視線が一斉に金色の毛並みをした美しい狐の身体に突き刺さる。

狐は、少女を男たちから庇うようにして立ち、歯をむき出しにして低い唸り声を上げた。

その様子に、少女ははっとしたような顔をする。対して男たちの顔には、驚きが去ると嘲るような表情が浮かんだ。

「ただの狐じゃねえか」

「なんだ？ お前。お姫さんを守ろうとでもいうのか？」

盗賊たちは下品な笑い声を上げ、狐を見下ろした。狐は臆せずじっと睨み返す。その様子に、男たちは次第に怒りを感じ始めたのか、笑いをおさめて狐を睨み始めた。

「ただの狐のくせに生意気なんだよ」

「お前、その女のペットか？ 主人に忠誠でも誓ってるんかい」

「おら、そごどけ。俺らはお前のご主人様に用があるんだからよ」

盗賊の一人が、狐に向かって石を投げた。が、狐は軽やかに跳躍して攻撃を避ける。

また別の一人が、鞘から短剣を抜いて狐に踊りかかった。狐は、今度は避けずに、何と真正面から剣に噛み付いて攻撃を止めた。頭を強引に振って不意をつかれた男から短剣を奪い取り、後ろに放り投げる。視界の片隅で、少女が慌ててその剣を拾い上げるのを確認した。

短気な盗賊たちの怒りに火がついたのを確認し、狐はすうと深呼吸する。

神経を研ぎ澄ませ、この場の隅々にまで気配を尖らせて張り巡らせる。

男たちが襲いかかってくるのがスローモーションに見えた。

狐は、深い深い暗闇のイメージを身体から放出した。どこまでも続く果てしない闇。一点の光さえ見えない、本当の闇を、狐は男たちに膜のように被せた。途端に男たちの動きが止まる。

「な、何だ!？」

「何も見えないぞ！」

男たちは握り締めた短剣をぶんぶんと振り回したり、自分の頬を平手打ちしたりして、必死

になって暗闇から這い出ようとした。

が、それは叶わない。狐がイメージを被せている間は、どんなに抗っても、並大抵の精神力ではそのイメージから抜け出せないのだ。彼の幻術はそこまで進歩していた。

狐はにやりと口角をあげて不敵な笑みを浮かべた。

幻術にすっかりはまった男たちを片付けるのは、狐にとっては赤子の手をひねるようなものだった。

再び集中して神経を尖らせる。今度は狐火を使えば、こんな男たちなど簡単に始末してしまえるはずだった。だが。

「やめて！」

少女が悲痛な叫びを上げた。振り向くと、少女が青ざめた顔で狐をひたと見つめていた。

「そのひとたちを傷つけないで！」

狐は一瞬、彼女の言ったことが理解できなかった。が、意味を理解すると、眉間に皺を寄せて彼女に抗議する。

「何でや。あんさんを襲おうとした奴らどすえ？」

それでも。と少女は悲しそうに顔をゆがめて狐を見た。「それでも、誰かが傷つくのは見たくない」

「なら、あんさんは目えつむつときい」

狐には彼女が理解できなかった。

自分を襲おうとした奴らに情をかけるなど、何を考えているのか。

今ここで彼らを始末せずには放りだせば、彼らはまず間違いなく少女を捕らえる。

囚われの身になった少女が一体どんな目に合うか。それは少女にも十分想像できるはずだった。

人間世界に疎い彼でさえ易々と想像できるのだから。少女にとって、この盗賊たちは敵であるのだ。

敵は潰さねばならない。彼はそう思っていた。

が、少女は悲しそうに首を横にふった。

少女の目には、突然出現した暗闇に囚われ、右往左往している哀れな男たちが映っていた。だから少女は腹の前で両手を組み、大きく深呼吸した。狐は、少女が一体何をするつもりなのかと怪訝な表情を浮かべた。少女はそんな狐を構いもせず、口を開いた。

深い深いところで

皆皆 繋がってる

遠い遠いところで

皆皆 出会ってる

どうして傷つけあうの？

どうして愛しあえないの？

昔は皆ひとつだったのに

昔は同じ生命だったのに

「待っている」と貴方が言った

どこまでも続く果てしない道のりを
貴方は一人で旅立った
ぼろり こぼれた小さな星は
きらり 悲しい涙流すでしょう
本当は皆ひとつ
今でも影は繋がってる

少女の桜色の唇から飛び出したのは、宇宙のように深く、永遠を感じさせる歌声だった。

狐は思わず幻術を解いてその歌に聴き入っていた。

その時、狐は感じていた。この少女はきっと普通の人間ではないと。

少女の歌声には、微かに魔法の香りがした。穏やかで、優しい魔法だった。

頑なな心を解きほぐし、温かく包みこむ、そんな魔法だった。

いつの間にか男たちも、自分たちがとっくに幻術から解放されていることも少女を襲おうとしていたことも忘れて歌に聴き入っていた。

少女の歌自体はまだまだ未熟であったが、歌声には無限の可能性があると狐には思われた。

ついて行きたい。この少女の傍にいたい。

狐は切実にそう思った。

まるで、一年に一度しか会えない愛おしい恋人を想うかのような切実さだった。

狐は、少女を見つめた。少女はどこか遠くを見つめながら、この場にいる誰にも自分の想いを分かってほしいと心を込めて懸命に歌っていた。その少女のひたむきな姿がまた、その場にいた者たちの心を打った。

少女の魔法は、そのひたむきな態度でより一層力を増幅させているのだった。

やがて少女が歌い終わった。その空間に沈黙が降りた。少女が恐る恐る男たちを見やると、男たちはどこか夢見心地といった顔で拍手を始めた。

「いや、素晴らしい」

「こんなに美しい歌は今まで聴いたことがない」

「お嬢さん、悪かったな。怖い思いをさせちゃって」

少女の歌の力で、男たちのなかから少女を襲おうという考えはすっかり消えうせていた。

かわりに男たちのなかに芽生えていたのは、少女を畏怖する気持ちだった。自分たちの悪意を消し去るだけでなく、自分たちを完全に味方につけてしまった少女の歌に、男たちは畏敬の念を感じていたのだ。それは、狐も同じことだった。

男たちは少女に道案内を買ってでたが、少女は控えめに、だがはっきりとその申し出を断った。

男たちは何度も少女と一緒に来るよう進めたが、少女は断固としてそれを拒んだ。

別に、男たちを信用していなかったわけではない。ただ彼女は、自分が彼らに迷惑をかけるのを恐れていたのだ。それを知ると、男たちは大人しくその場を去っていった。後に残ったのは少女と狐だけであった。

「ありがとう。また助けてもらったね」

少女はふんわりと笑った。愛らしいが、どこか頼りない笑顔だった。見る者に、守りたいと思わせるような。狐は首を小さく横に振って、微笑み返した。

「我を、連れていってくれんかのお」

その言葉は、驚くほどあっさり狐の口から漏れた。言葉を発した本人が少女よりも驚いたくらいだった。少女は数度瞬きをすると、

「でも、あたしとの旅は、つまらないかもしれないよ？」と言った。

「たとえそうだとっても、あんさんについて行きたいんです」

狐ははっきりとした口調で言った。これが、今の彼の本心だった。もう間違えない。自分の心を疑わない。彼は、彼女の傍にいたかった。それが彼の望みだった。初めて、自分のために望んだことだった。

少女は暫く何も言わずに真顔で狐を見つめていたが、やがて優しい微笑みを浮かべた。

「あたしはミノリ。君の名前は？」

「我に名前はありまへん」

狐は即答した。狐はずっと狐だった。今まで名前が必要になったことなどなかったのだ。

野生に生きる精霊なのだから、当然といえば当然だった。狐の返答を聞くと、少女はますますにっこり笑って、

「じゃあ、今日から君は宵風だね」

「よい、て？」

彼が首を傾げると、

「うん。まるで風みたいな軽やかさ、優雅さであたしのこと助けに来てくれたから、宵の風で宵風」

どうかな？ と少し不安そうな表情になって狐に問う。まさか名前を貰えるとは思ってしなかったもので、最初は驚いていた彼だったが、その名前が意外な程自分にしっくりくるので、

「ええ名前や。気に入ったわあ。おおきに」と素直に言った。

「これからよろしくね、宵風」

宵風は頷いた。

「よろしく、ミノリはん」

こうして狐と少女は出会ったのだった。

「宵風、お待たせ！ 色々買ってきたよ！」

ミノリが駆けてきたので宵風は思い出から我に返ってミノリに笑いかけた。

「何か無駄遣いしてはらへん？」

ちやかすような宵風の口調に、ミノリは頬を膨らませた。

「無駄遣いなんてしてないもん。ちゃんと必要最低限のものしか買ってきてません」

「ならええけどな」

先に歩き始めた宵風の後ろ姿に、不満をぶつけながら後をついてくるミノリ。

そんな彼女を微笑ましく思いながら、彼は夜空を懐かしい目で見上げた。

あの日も、こんな風に晴れ渡っていて、この上なく綺麗な星空が見えた。

雲ひとつなく、星の光がひとつひとつ懸命に輝いていて。まるで自分たちの出会いを星が祝福してくれているかのように感じられたものだった。

「宵風？ 何考えてるの？」

ミノリが不思議そうに宵風に声をかける。彼の隣に並んで歩き、重そうな荷物を肩から下げなおした。宵風はそんな彼女をちらと見上げた。

「ちょっと、懐かしい思い出を」

まだ不思議そうな表情を浮かべている少女に笑いかけてから、宵風は真っ直ぐ前を向いた。

自分たちの旅路はまだ続く。

いつか、この旅が終わるそのときまで、自分は彼女の傍を離れず、この愛おしい天使を守って

いこう。彼は星空の下で強く誓った。

*** To be continued ***

6：恋の歌

黒髪の愛らしい少女ミノリと金色の美しい毛並みを持つ狐宵風は、映画産業の盛んな街、リウドにやって来ていた。

リウドは大きな街で人口も多く、どこに行っても人で溢れていた。

今まで小さな街や村にばかり滞在していたミノリと宵風にとっては、もっとも大きな街のように感じられ、二人はただただ人の多さに圧倒されるばかりであった。どこに行っても人が多いので、どこで歌っても同じかとミノリには思われた。

とりあえず彼女はいくつかある駅を毎日順番にまわって歌うことにした。

二人は、この街に一週間程滞在することに決めた。宿泊費が一番安いところでも今までと比べれば少し高額ではあったが、二人は各地を回って歌を歌うことで大分旅の資金を貯めていたので、一週間の宿泊費くらいは苦もなく出すことができた。

ミノリはまず街の一番東側にある駅で歌を歌った。彼に出会ったのは、リウドに来て最初の日のことだった。

「あなたの歌声に心打たれました」

青年は顔を輝かせながら、ミノリの小さな両手を硬く握り締めて熱っぽくそう語った。ミノリは困ったようにはあ、と小さく相槌を打っておいた。手を離してほしかったが、青年は頬を紅潮させて続けた。

「貴女のように美しい歌声をした愛らしい女性には、いまだかつて出会ったことがありません！ どうかこの僕とお付き合いしていただけますでしょうか？」

「なんやてえ？」

ミノリの足元でそれまで知らぬふりを決め込んでいた宵風が、青年の言葉に反応した。耳をぴくりと動かし、眉間に思い切り皺を寄せて青年を見上げる。

青年には宵風の言葉は分からないので、彼は宵風などには目もくれずにミノリを情熱的に見つめ続ける。ミノリはすっかり困りきって、助けを求めるかのように宵風に視線を落とした。宵風は半ば睨むようにして青年を見つめるのに忙しい。

「あのう……困るんですけど」

弱ったミノリが口にした、交際を断る言葉は、青年によって見事にさらりと流された。すがすがしいほどの笑みを浮かべて、

「明日も会いに来ます。お返事はいつでもどうぞ。急ぎませんので」と言いおいて青年はその場を去っていった。ミノリと宵風はあつけにとられたように青年の後ろ姿を見送った。

次の日。歌う場所を変えたというのに、その日も青年は言葉通りやって来た。熱い視線をミノリに注ぎ、ミノリが歌を歌い終わるとすぐさまやって来てミノリの手をとる。

「貴女は地上に舞い降りた天使だ。僕は貴女を一目見た瞬間、運命を感じました。きっと僕と貴女は結ばれる運命にあったのです。どうかこの僕とお付き合いしてください」

「だから、あのう、困るんですけど」

またもや青年はミノリの言葉をさらりと受け流した。

「僕の名前はカイン。どうです？ これから夕食でも」

カインという名の青年は、爽やかな笑みを浮かべてミノリを夕食に誘った。ミノリはすっかり困りきって宵風を見やる。どうせ断ったってまた聞き流されるだけだろう。どうしたらよいものか、ミノリには分からなかった。こういうことは初めての体験なのだ。

宵風はといえば、なにやら大層不機嫌な様子で、もう人目をはばかることなくカインを睨みつけていた。しかし睨みつけられている当の本人は、ミノリにすっかり夢中なので宵風の射るような眼光に怯むこともない。気づいてすらい

ない。

ミノリの帽子にコインを入れていく人々は、二人を面白そうに見やりながら去っていく。

ミノリが困りきっていることは、青年カインを除けば誰の目にも明らかなのに、誰ひとりとしてミノリを助けようとはしてくれない。ミノリはこの街の人々の薄情さをうらめしく思った。

そんな時、一人の女性がミノリとカインの元にやって来た。ミノリは不思議に思って女性を見やる。

丸い眼鏡をかけた三つ編みの女性は、しばらく二人の傍で躊躇っていたかと思うと、腹を決めたように拳をかためて

、「カイン。その子が困っているでしょう。手を離してあげて」とカインを諫めた。その声に漸くカインがミノリから視線を逸らす。女性を一目見たカインは、何だ君か、というような顔をして、

「ほっといてくれ、モミ。僕は今からこの方と夕食を共にするのだよ」

とミノリには誘いを受けた覚えは全くないのに、勝手に話を進めて言った。どうやらこのモミという女性はカインと親しい仲のようだ。ミノリはふんで、何とかカインの手から自分の両手を引っこ抜いてモミに向き直る。今のミノリは藁にも縋りつきたい思いだった。

「あの、貴女は？」

「彼女はモミ。僕の幼馴染ですよ」

ミノリはモミに尋ねたのに、モミが答えようと口を開く前にカインがさらっと答えた。

ミノリは困った人を見るような目つきでカインを見やったが、カインはミノリの視線を受け止めただけで有頂天になる。ミノリはすっかり呆れかえってすぐさまモミに視線を戻した。

「カインさん。もしあたしと夕食を共にしたいのなら、彼女も一緒に」

ミノリの言葉に、宵風を含め三人が驚いたような表情になる。

「何故です。僕は貴女と二人きりでお食事を、」

「彼女と一緒にないなら、あたしは断固としてお断りします」

ミノリはにっこりとカインに笑いかけた。その天使のような笑顔を真正面から見てしまったカインには、その条件を受け入れない訳にはいかない。カインはチャンスを逃すまいとモミも食事に誘った。

モミは躊躇うように口元に手をやり、おろおろとしていたが、ミノリの頼みこむような視線を受け、小さく頷いた。ミノリの足元で、宵風が不機嫌そうに小さく鳴いた。が、ミノリは敢えて彼の訴えを無視した。

四人は近くのカフェに向かった。

本当は、カインはもっと高級なレストランにミノリを誘いたかったのだが、ミノリがぜひとも宵風も一緒にと断固として言い張るので、仕方なく動物同伴の許される店を探したのだった。

動物同伴が許されるだけあって、店内にはペットを連れて食事を楽しみにきている客が多かった。

ミノリはその雰囲気半分満足、半分不満を感じた。

満足したのは、動物同伴が許されているので、宵風を連れて入っても誰も奇異の眼差しを宵風とミノリに向けなかったため。

不満を感じたのは、宵風がミノリのペットと認識されてしまったようであるためである。

しかしここは不満を言っても仕方がないとミノリは肩を竦めた。宵風は別に気にはしていないようだし、本人がどうでもいいと思っているならばミノリがひとり気に病む必要はどこにもなかった。

四人は窓際のテーブルに案内された。丸いテーブルを囲んで座る。ミノリの前にカイン、カインとミノリの間にもモミが腰を落ち着けた。宵風はもちろん、ミノリの足元である。

メニューを開いてそれぞれ注文し、料理が運ばれてくるまで雑談をした。

もっぱら、カインがミノリのお話を聞きたがり、ミノリは差し支えない程度に自分のこれまでの旅のことをかいつまんで話した。

何故歌っているのか、何故旅をするようになったかなどの質問はそれとなくはぐらかしたが。

はぐらかす度にカインは若干不満そうな様子を見せたが、敢えてしつこく追及するような無粋な真似はしなかった。

宵風との関係も聞かれた。この質問に対してミノリは、宵風は家族だと即答した。

「かわいい狐さんですね」モミが眼鏡の奥の瞳を優しい色で一杯にして、宵風を見つめた。彼女は口数こそ少なかったが、穏やかで落ち着いた雰囲気を持った女性だった。

その話しぶりや態度から、ミノリは彼女のことをひどく気に入った。この街に住めたら、彼女のような人と友達になりたかったと密かに思った。

モミがそっと宵風の頭を撫でると、宵風は気持ち良さそうに目を細めた。宵風もモミのことが気に入ったのだろう。大人しく撫でられている。彼はプライドが高いので、滅多なことではこんな風に気持ち良さそうに撫でられることはしないのだ。ミノリはそんな彼を見つめて微笑ましい気持ちになった。

料理が運ばれてきてからも、雑談は続いた。今度は主にカインが話す番だった。

彼は自分の家族構成から始まり、ミノリに自分に関することを少しでも多く知ってもらおうとして、聞かれてもいないのに細かいことまでべらべらと喋った。途中からミノリは適当に相槌を打つだけでカインのお話をまともに聞いてはいなかったが、カインはそうとは気づかず話し続けた。

モミには、ミノリが彼のお話を聞いていないことが分かったらしく、彼女は困ったようにカインを見つめていた。その眼差しにどこか温かいものを見た気がして、ミノリは思わずモミをまじまじと見つめてしまった。

モミと視線がぶつかった。ミノリはごまかすように苦笑して、食事を宵風に取り分けた。モミの不思議そうな視線にわざと気づいていないふりをした。

食事が済むと、ミノリは用事があるからと言って二人と別れ、そそくさと宿に帰った。部屋に戻ってとりあえず入浴し、さっぱりしたところで部屋に備え付けのソファに身を沈めた。すっかり疲れきっていた。

「ミノリはん」

「ん？ 何、宵風」

ソファで寛ぐミノリに、宵風が声をかけた。ミノリが振り向くと、宵風はいつの間にか人型になっていて、ベッドに腕を組んで腰掛けていた。どこか不機嫌そうなその様子にミノリは思わず首を傾げる。

「この街、早う出発せえへん？」

「？ どうして？」

ミノリの疑問に、宵風は黙り込んで答えなかった。ミノリは暫く宵風が答えるのを待っていたが、彼が一向に口を開く素振りを見せないで終いには諦めてため息をついた。彼の不機嫌さの理由が何となく分かったような気がした。

「カインさんだね」

おしゃべりで情熱的な青年のことを思い出しながら言う。

「確かにちょっと鬱陶しいところもあるけど、悪い人じゃないと思うよ。別に宵風が心配しなくても、あたしは大丈夫だから」

「そうやなくて」

あたっているようでいてあたっていない。掠っているのに肝心なところを外している。

宵風は少し歯がゆい思いで彼女を見つめた。ミノリは怪訝な様子で彼を見つめ返す。その顔が、違うならちゃんと言葉で説明してくれと訴えていた。

が、彼には言葉で説明するつもりなど毛頭ない。説明しなくても、分かってくれたらいいのに。

無理だとは分かっているのだが、そう願わずにはいられなかった。

ミノリは暫く宵風を怪訝そうに見つめていたが、不意に合点したような表情を作るとぼん、と手を叩いて、「もしかして、宵風、焼きもち妬いてる？」と暢気な調子で聞いた。

「安心してよ、宵風。あたしにとって一番大切なのは宵風なんだから」と相変わらず軽い調子で相手を宥めるミノリ。宵風はそんな彼女を、何も言わずに真剣な表情で見つめ続けた。

最初は笑って彼を見やっていたミノリだったが、彼があまりにも真剣なので次第に笑みが薄れていき、戸惑ったような表情になる。そわそわとしだし、落ちつかなさそうに視線を移動させる。手をいじったりして何とか落ち着こうとするが、宵風があんまり真剣な表情で見つめてくるので、終いには「何」とつつけんどんに聞いてしまった。

宵風は、「別に。なんもあらへんよ」と言ってふいと彼女から顔を背ける。それでもミノリは未だにどぎまぎしたままだった。

人型時の宵風はひどく端整な顔立ちをしているのだ。

あらゆる女性をたちまち虜にしてしまう魅力を持っているので、彼は街中では滅多に人型をとらない。人型をとってかつて厄介な目にあつたことがあるのだ。

ある町で人型の宵風と歩いていたら、宵風は一気に女性に囲まれてしまって女性の輪から抜け出せなくなってしまった。

ミノリが宵風の恋人かと誤解され、若い魔法使いに呪いをかけられそうになったこともある。

そういうことがあつて、宵風は人前では滅多に人型にならない。彼としては、ミノリを危険な目にあわせたくないのだ。

その代わり、ミノリと二人きりのときはよくこうして人型になる。自分に気を許してくれているのだなと思うとミノリは内心嬉しかったが、同時にどこかどぎまぎしてしまう自分がいることに最近気づき始めていた。

「そ、そういえば！」

速くなった鼓動を何とか落ち着けようと、わざと大袈裟に声を出してみる。

「モミさんって、もしかしてカインさんのことが好きなんじゃないかな」

「何でそう思うん？」

「何となく。女の勘ってやつ？」

宵風がいつもの調子に戻ったのに内心ほっとしつつミノリが答えた。ミノリの答えに、なんやそれ、と苦笑する宵風。

「もしそうやったら、どうするん？」

ミノリは暫し思案した。自分が二人のキューピッドになろうとしたところで余計なお世話だろうし、第一カインは今、なぜかは知らないが自分に熱を上げている。そう簡単に別の女性に心移すとは思えなかった。

しかし、モミとカインが結ばれば良いとミノリは思う。こんな会ったばかりの見ず知らずの自分より、お互い相手のことをよくわかっている幼馴染の方が、カインにとってもモミにとってもふさわしいのではないだろうか。

といつつももしかしたら自分はモミのために何か行動を起したいだけなのかもしれないとミノリは思う。

モミに好意を持ち始めたミノリが、モミの役に立ちたいと思うのは仕方のないことだった。ミノリはそういう性質の持ち主であったし、宵風も十分ミノリの性格を熟知していた。だから彼は何も言わなかった。

ミノリが頭のなかでどうやってカインとモミの距離を縮めようかと考えていることに対しては、ミノリはほとんど無意識のうちに頭で作戦を練り始めていた。まだモミがカインに好意を寄せているとはつきり分かった訳でもないのに。

朝が来ると、ミノリは宵風と共にまた別の駅に向かった。

今日来た駅はこの街では一番小さな駅で、リウドの南西に位置していた。

昨日歌った駅からは遠く離れていたが、やはりそれでもカインはミノリに会いにやって来た。

本当に、何故ミノリの居場所が分かるのだろうか。場所も時間も違うのに。カインに聞けば愛の力だともいわれそうなので聞くつもりは毛頭ないが。

ミノリはモミの姿を探した。モミはすぐに見つかった。カインから少し離れたところに彼女はいた。

心配そうにミノリとカインを交互に見つめている。ぱちりとミノリとモミの視線がぶつかった。モミは軽く微笑み、会釈をした。ミノリも微笑みと会釈を返す。

この一瞬で、ミノリはやっぱりモミはカインのことが好きなのだと確信した。どこにもそんな証拠はないというのに、不思議と、この考えがあたっているという感じがした。

カインの目を自分からモミに向けよう。ミノリはそう決意した。

どうしたらそうできるのかは分からないが、とりあえず自分は自分にできることをしよう。

自分にできること。

それは、ミノリの場合歌うことだった。

だからミノリは歌った。心を込めて。願いを込めて。観衆の心に響くように。

特に、カインとモミの心に響くように。

星空の下を漂う空気を吸い込む。どこか埃っぽいその空気が、何となく甘く感じられた。ミノリの桜色の唇が、歌を紡ぎ出した。

ねえ こっちを向いて

私のこと どう思ってる？

ねえ こっちを向いて

私 貴方に伝えたいことがあるの

今すぐに もう待てない

大好きよ 大好きよ

貴方のことが 誰よりも大好き

大好きよ 大好きよ

世界で一番 貴方のこと愛してる

それは、ミノリが今まで歌ったなかでもっとも甘い部類に入る歌だった。

ありふれた歌詞だったが、それだけに想いを込めるとミノリの歌の才能がきらりと光った。

ミノリは歌い始めると、何故自分がこの選曲をしているのかも、誰のことを想って歌い始めたのかも忘れて、歌にすっかり溶け込んでいた。

ミノリの思考は歌と一体になり、辺りに広がっていく。

道行く人々は次第に足を止め、ミノリの、星空のように淡い光を伴う澄んだ歌声に聞き惚れる。

一人、また一人とギャラリーが増え、暫くするとミノリは大勢の人に囲まれていた。

しかし歌っている最中の彼女はやはりいつものようにそのことには気づかない。

ただ彼女は純粋に歌を歌うのを楽しんでいる。それだからこそ一層、彼女の歌は美しいのだ。

純粋な楽しみから歌っているから、彼女の歌は光り輝くのだった。そのことに、ミノリ自身が気づいていなかった。彼女はただ無意識のうちに楽しんで歌っていた。

一曲目を歌い終え、息を整えると聴衆に向かって軽くお辞儀をする。

拍手が沸き起こった。ミノリはいつもの癖で、照れたように笑いながら頬をかく。

足元の帽子のなかに、コインがいくつもいくつも投げ込まれていく。それを見て、ミノリは嬉しかった。少しずつでも、自分の歌が認められてきているのが分かった。

だが彼女は図に乗ることはしなかった。

ミノリにはわかっていた。

確かに自分の歌はこうして認められ始めたかもしれないが、今はまだスタート地点に立ったばかりなのだということ。

自分の歌はまだ未熟で、磨く余地があるということ。

そのことをちゃんと自覚していたから、彼女は謙虚さを忘れることはしなかった。

宵風はそれが嬉しかった。ミノリの歌を聴きながら、彼女についてきて正解だったと、彼はいつも思うのだった。

彼女は二曲目を歌い始めた。二曲目もまた、甘い恋の歌だった。というよりも、今日のミノリには恋の歌以外歌うつもりはなかった。彼女はただ、カインとモミの心に自分の歌が届けばいいと思っていた。そう心から思っていたから、ミノリの歌の魔法の力が純粋に発揮された。

三曲、四曲と続けて歌い、五曲歌ったところでミノリは一息ついた。

恋の歌のオンパレードは、聴く者の心にどのように届いたのだろうか。

聴衆たちは何か考えるような表情でミノリの帽子のなかにコインを入れていく。恋人のことを考えているのだろうか。とミノリは思った。

もし自分の歌を聴くことで恋人のことを思い出してくれたなら嬉しいと彼女は思う。

そして、肝心の二人。モミとカイン。彼らに、自分の歌は一体どのような作用をもたらしたのだろうか。気になって彼女はコインを入れてくれる人々に返す挨拶もそこそこに、人ごみのなかに二人の姿を探した。

そして、見つけた。二人はこちらを向いて微笑んでいた。モミは純粋に温かい笑みを、カインはどこか諦めたような、それでいて清々しい笑みをそれぞれに浮かべている。

コインを入れる人の列が途切れると、二人はミノリの傍にやって来た。ミノリは笑顔で彼らを迎える。

「いや、実に素晴らしかった」

カインは若干大袈裟な態度でミノリの歌を褒め称えた。

「今日の歌はまた一段と素晴らしかった」

「私も。今日の歌は特に素敵だったと思います」

モミが控えめな声で言う。「歌詞自体はありふれたものでしたけれど、それだけ一層貴女の歌声が心に直接響いてくるといふか何と云うか。とにかく、よかったです」

ミノリは笑顔で二人に礼を言った。面と向かって褒め称えられるのはやはり恥ずかしかったが、悪い気はしない。単なるお世辞を言っているのではないことは、二人の態度を見ていればよく分かった。だからミノリは嬉しかった。

ここで思いあがってはならないと心のなかで自分を戒めながら、ミノリは二人の賛辞を照れたように頬を掻いて聞いていた。そんな彼女を、カインが眩しそうに見つめている。彼の視線に遅まきながら気づいたミノリが小首を傾げて彼を見ると、カインは苦笑した。

「参りました」

唐突に出てきた彼の言葉に、ミノリは怪訝そうに眉を顰める。しかしモミには彼の言いたいことが分かったらしい。ミノリを慈愛にあふれた瞳で見つめている。ミノリは説明を求めて二人を交互に見やった。

「今日の歌を聴いて、分かりました。貴女には既に心に決めた大切な人がいらっしゃるのですね」

ミノリは思わずきよんとする。

何の話だ、と彼女は理解できていない。

だがカインは一人納得して、いや、モミもそう思いこんでいるらしく、意味ありげな視線をミノリに送っている。

カインの声はどこか寂しそうで、悔しそうだった。思わずミノリが彼に声をかけたくなるほど。

モミが慰めるように彼を見やる。カインは真っ直ぐにミノリを見つめていた。

「貴女のことを諦めるのは、とてもつらいことですが……。でも、こればかりは仕方ありませんね」

昨日は夕食に付き合ってくださいって、ありがとうございます、と言って、カインはミノリに背を向けて去っていった。そんな彼の後をモミが慌てて追う。途中振り返って、ペコリとミノリに会釈した。

二人の後ろ姿があっという間に遠ざかっていく。ミノリは訳が分からずに二人の後ろ姿を呆然と見つめていた。なんだかよく分からないが、とりあえずカインは自分のことを諦めてくれたようだと思えてくる。

「やれやれ、やっと諦めてくれたみたいやのう」

宵風が安堵のため息を漏らした。彼は彼で気が気でなかったのだった。そんな彼の心中をしらないミノリは、少し困惑した表情を残したまま宵風に微笑みかける。

(心に決めた大切な人なんて、私にはいないのに……)

そう思った瞬間、本当にそう？ ともう一人の自分が問いかけてきた。

本当に、貴女には大切なひとはいない？ 思わずはっとするミノリ。そんな彼女を怪訝そうに見上げる宵風。

「ミノリはん？ どうしたんです？」

何でもないよ。宵風を安心させるために発した言葉と笑顔は、自分でも嘘としか思えなかった。

To be continued